

教育学研究科教員業績一覧

(2016年4月1日から2017年3月31日)

基礎教育学コース

小玉重夫(教授)

〈単著〉

小玉重夫『教育政治学を拓く－18歳選挙権の時代を見すえて』勁草書房, 2016年8月, 全226頁

〈編著〉

『岩波講座・教育 変革への展望1 教育の再定義』(編者代表・小玉重夫, 執筆者 小玉重夫, 湯浅誠, 志水宏吉, 宮本太郎, 秋田喜代美, 湯澤直美, 佐藤学, 鈴木寛, 北村友人, 酒井啓子) 岩波書店, 2016年4月, 全304頁

『岩波講座・教育 変革への展望6 学校のポリティクス』(編者代表・小玉重夫, 執筆者 小玉重夫, 藤田英典, 青木栄一, 大桃敏行, 志水宏吉, 小国善弘, 菊地栄治, 小山静子, 木村涼子, 村上祐介, 広瀬裕子, 荻谷剛彦) 岩波書店, 2016年11月, 全342頁

〈単著論文〉

小玉重夫「18歳選挙権から学力の市民化を問う－「学力幻想」を超えて－」『高生研第54回全国大会研究紀要』全国高校生活指導研究協議会, 2016.8. pp.73-80

小玉重夫「戦後教育学の外部」『近代教育フォーラム』教育思想史学会, 第25号, 2016.9., pp.104-106

小玉重夫「アクティブラーニング時代の教育と印刷文化」『日本印刷学会誌』vol.53, No.6, pp.432-433, 2016.12. 社団法人日本印刷学会, DOI <http://doi.org/10.11413/nig.53.432>

小玉重夫「民主的市民の育成と教育カリキュラム」秋田喜代美編『岩波講座・教育 変革への展望5 学びとカリキュラム』岩波書店, 2017年2月, pp.185-208

〈共著論文〉

小玉重夫・萩原克男・村上祐介「教育はなぜ脱政治化してきたか－戦後史における1950年代の再検討－」『年報政治学2016－I』日本政治学会, 木鐸社, 2016.6., pp.31-52

〈学会発表〉

小玉重夫「過剰包摂社会の超克と「ポスト・第三の道」－教育政治学の視点から」日本学術会議「公正原理を重視する公教育システムの再構築」分科会公開シンポジウム「日本の公教育システムの再構築－教育の公正の視点から－」2016年7月2日 日本学術会議講堂

小玉重夫「18歳選挙権の時代のカリキュラム・イノベーション－教育の再政治化を見すえて－」日本教育学会第75回大会, 期間 2016年8月24日(水) 会場 北海道大学, シンポジウムI (公開「育成すべき資質・能力」と「アクティブ・ラーニング」をめぐって－次期学習指導要領改訂に向けて－)

Shigeo Kodama “Citizenship Education in Japanese Universities”, The 17th International Conference on Education Research 10.13., 2016 Hoam Convention Center, Seoul National University, Seoul, Republic of Korea

小玉重夫「指定討論:「学びの成果」の構成的外部」東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化センター主催シンポジウム「国際的な学力論争に日本はどう向き合おうとしているのか－標準化と多様性をめぐるダイナミズム－」東京大学医学部鉄門記念講堂(医学部教育研究棟14階) 2016年11月5日

小玉重夫「18歳選挙権と主権者教育」2016年度日本地方自治学会研究会, 南山大学・名古屋キャンパス, 第2日目 11月20日(日)

〈その他〉

小玉重夫「政治活動と政治教育は車の両輪」『月刊高校教育』vol.49. No.8, 2016.7. 学事出版, pp.22-25

小玉重夫「インタビュー:今, この人に聞く「考える市民」を育む土台は, 小学校の「考える授業」にある」(聞き手 由井蘭健, 山田誠, 佐々木昭弘)『教育研究』No.1377, 2016.11, 筑波大学附属小学校初等教育研究会, pp.34-39.

田中智志(教授)

〈著書〉

- 1 田中智志監修『英語科教育』(教科教育学シリーズ第9巻)橋本美保と共監修,馬場哲生編,一藝社,2016(平成28)年9月14日.
- 2 田中智志監修『理科教育』(教科教育学シリーズ第4巻)橋本美保と共監修,三石初雄編,一藝社,2016(平成28)年9月14日.

〈雑誌論文〉

- 1 田中智志「隠喩とイロニー——交感する心情に依る超越性」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』第42号 pp.69-88 2016年7月29日.
- 2 田中智志「カイロスの存在論から——教育はどのように超越性を求めうるか」教育哲学会編『教育哲学研究』第113号 pp.8-13 2016年5月10日.
- 3 田中智志「教育学」『蛭雪時代4月臨時増刊 全国大学学部案内号』旺文社, pp.284-286, 2017年3月30日.

比較教育社会学コース

恒吉僚子(教授)

〈著書〉

- Tsuneyoshi, R. (編著) (2017) *Globalization and Japanese "Exceptionalism" in Education: Insider's Views into a Changing System*. London and New York: Routledge.
- Tsuneyoshi, R. & Kitamura, Y. (共著) (2017). Introduction.. Same as above, pp.3-18.
- Tsuneyoshi, R. (単著) (2017). "Exceptionalism" in Japanese education and its implications. Same as above, pp.19-42.
- R. Tsuneyoshi, Takahashi, F., Ito, H., Lee, S., Sumino, M., Kihara, T., Kubodera, S., & Ishiwata, H. (共著) (2017). Japanese schooling and the global and multicultural challenge. Tsuneyoshi, R. et als. Same as above, pp.190-212.

〈分担執筆〉

- 恒吉僚子(単) (2016). 「『場』としての家庭と異文化間教育研究」『第2巻 文化接触における場としてのダイナミズム』異文化間教育学会企画「異文化間教育学の体系化」, 加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明編, 明石書房, pp. 4-31.
- 恒吉僚子(単) (2016). 「教育における『グローバル人材』という問い」北村友人編(編集委員:佐

藤学, 秋田喜代美, 志水宏吉, 小玉重夫, 北村友人)『グローバル時代の市民形成』第7巻, 岩波書店, pp.23-34.

〈学術論文〉

Tsuneyoshi, R., Kusanagi, K. & Takahashi, F. (2016). Cleaning as part of TOKKATSU: School cleaning Japanese atyle." *Working Paper Series* No. 6, Center for Excellence in School Education, The Graduate School of Education, The University of Tokyo. <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/wp/>.

〈学会発表〉

Tsuneyoshi, R. Invited speaker. "The Japanese Model of Schooling and the Whole Child Education: Tokkatsu" Symposium on Retrospect and Prospect of Curriculum Reform in Taiwan: 1996-2016, "The Development of Curriculum Field and Reform in Taiwan for Recent 20 Years." ACI and the Department of Learning & Media Design, Taipei Municipal University. Taipei. Oct., 2016.

橋本 鉦 市(教授)

〈雑誌論文〉

- 橋本鉦市・小原明恵・加藤靖子「現代女子大学の自己認識に関する一試論—学長メッセージの内容分析—」『名古屋高等教育研究』第17号, 81-99頁, 2017年3月.
- 橋本鉦市「わが国の専門職養成をめぐる課題と展望(特集 図書館員のキャリアマネジメント)」『図書館雑誌』2016年第10月号, 2016年10月, 632-635頁.
- 戦後日本における大学広告の内容分析(2) —『蛭雪時代』(昭和24~63年)を対象として—『東京大学大学院教育学研究科紀要』第56巻, 2017年3月, 97-107頁.

〈学会発表〉

小原明恵・石井美和・橋本鉦市「保育士の専門職コンピテンシー—養成に関する養成機関・保育所・専門職団体の認識—」『東北教育学会』第74回大会, 2017年3月5日, 東北大学

本田 由 紀(教授)

〈著書〉

本田由紀(単著), 「教育と職業との関係をどうつなぐか—垂直的/水平的多様性の観点から」佐藤学他編『岩波講座 教育 変革への展望2 社会の

なかの教育』, 岩波書店, 2016, pp.169-198.

〈雑誌論文〉

本田由紀 (単著), 「1990年代以降の大卒就職: 変わったもの, 変わらなかったもの, 変わるべきもの」, 『国民生活』55, 国民生活センター, 2017, pp.1-5.

本田由紀 (単著), 「「資質・能力」のディストピア: 全域化する徳育」, 『人間と教育』93, 旬報社, 2017, pp.36-43.

本田由紀 (単著), 「ワークルール教育をいかに進めるか」, 『季刊労働者の権利』318, 日本労働弁護団, 2017, pp.49-61.

本田由紀 (単著), 「研究型アクティブラーニングの現状・課題・可能性」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』56, 東京大学大学院教育学研究科, 2016, pp.245-262.

本田由紀 (単著), 「若者の就労問題: 仕事の「ブラックボックス化」の克服に向けて」, 『神奈川大学評論』84, 神奈川大学, 2016, pp.31-39.

本田由紀 (単著), 「教育と労働の関係をめぐる社会間の差異—「資本主義の多様性」論に基づく考察と検証—」, 『教育学研究』83(2), 日本教育学会, 2016, pp.140-153.

〈その他〉

本田由紀 (学会発表), 「人文社会系大学教育の職業的レリバンス—卒後1年目の大卒者を対象とする第3波パネル調査結果より—」(河野志穂と共同発表), 『日本教育社会学会第68回大会要旨収録』, 2016.

仁 平 典 宏 (准教授)

〈著書〉

仁平典宏 (分担執筆), 『社会の芸術/芸術という社会—社会とアートとの関係, その再創造に向けて』(北田暁大・神野真吾・竹田恵子 (社会の芸術フォーラム運営委員会) 編), フィルムアート社, 2016, 総ページ数26.

仁平典宏 (分担執筆), 『市民社会論—理論と実証の最前線』(坂本治也編), 法律文化社, 2017, 総ページ数20.

〈雑誌論文〉

(共著)

Kayako Sakisaka, Honami Yoshida, Kenzo Takahashi, Takashi Miyashiro, Toshiya Yamamoto, Masato Fujiga, Hidemi Kamiya, Norihiro Nihei, Junko Someno, Reiji

Fujimuro, Kazuaki Matsumoto, Nobuko Nishina, "Living environment, health status, and perceived lack of social support among people living in temporary housing in Rikuzentakata City, Iwate, Japan, after the Great East Japan Earthquake and tsunami: A cross-sectional study" *International Journal of Disaster Risk Reduction* 21, pp.266-273.

〈その他〉

仁平典宏 (単著), 「居酒屋社会学談義 最終夜—再帰的近代・アイデンティティ・公共性」『POSSE』31号, NPO法人POSSE編, 2016

仁平典宏 (単著), 仁平典宏「パッと見, 大差ない教育政策を読み解くために—5つのテーマ・3つのキーワード」, 『SYNODOS』(オンライン) <http://synodos.jp/education/17471>, 2016

仁平典宏 (対談)「これからのリベラルにならなければならないか?」『 α -synodos』vol.202+203

〈学会発表〉

仁平典宏, 「「ボランティア」「NPO」への視線と方法—「メタ的であること」をめぐるオートエスノグラフィ」, 日本NPO学会第4回 NPO夏の北海道セミナー招待講演, 2016

仁平典宏, 「東日本大震災支援団体の資金構造と「自律性」問題—「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成対象団体調査から」, 第89回日本社会学会大会, 2016

仁平典宏, 「反転する戦後と「ボランティア」の位置」ボランティア全国フォーラム2016トークセッションIパネリスト, 2016

生涯学習基盤経営コース

牧 野 篤 (教授)

〈著書〉

『「つくる生活」がおもしろい—小さなことから始める地域おこし, まちづくり—』, さくら舎, 2017年1月, 全209頁

〈論文 (単著・日本語)〉

「現下の社会保障としての「学び」—(社会)をつくりだす生涯学習へ—」, 新海英行・松田武雄編著『世界の生涯学習—現状と課題—』, 大学教育出版, 2016年10月, 216-228頁

「公民館「的なもの」の可能性—自治と分権を發明し続けるために—(上)(下)」, 『月刊公民館』平成28年10月号(通巻第713号), 2016年10月, 28-36頁, 平成28年11月号(通巻第714号), 2016年11月,

18-24頁

「飯田市民館の特徴と可能性—本アンケート調査の視点—」, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田市社会教育調査チーム『地域社会への参加と公民館活動—飯田市の千代・東野地区におけるアンケート調査の分析から—/学習基盤社会研究・調査モノグラフ12』(序章部分), 2016年7月, 1-5頁

「つながりがつくる新しい〈社会〉—少子高齢・人口減少社会における社会教育・生涯学習の役割—」, 岐阜大学『平成28年度 社会教育主事講習テキスト』, 2016年7月, 173-186頁

〈論文 (単著・中国語)〉

「六個学習型都市の規劃與実施策略的比較探討—東京観点— (Exploring Plans and Strategies of Six World's Learning Cities: Tokyo Perspective)」, 台北市『2016台北市学習型都市願景国際研討会 (International Conference on Visions for Taipei Learning City)』, 2016年11月, 721-729頁

〈講演記録・エッセイ他〉

「〈全体を振り返って〉」, 学びを通じた地方創生コンファレンス東京実行委員会『—文部科学省委託事業・学びを通じた地方創生コンファレンス—学び合いが拓く持続可能な社会「東京コンファレンス」報告書』, 2017年3月, 20-23頁

「想像力と信頼—第3版「おわりに」」, 東京大学大学院教育学研究科『信頼される論文を書くために 第3版』, 2017年3月, 39-41頁

「基調講演 自治と分権～公民館の本質と新たな役割～」, 第38回全国公民館研究集会神奈川大会・第57回関東甲信越静公民館研究大会 in さがみはら実行委員会事務局『記録集「今, なぜ公民館が必要とされているのか?～公民館の存在意義を問う～」』, 2017年2月, 7-22頁

「パネルディスカッション 公民館設置次官通牒から70年と公民館の未来」, 『月刊公民館』平成29年2月号, 2017年2月, 8-17頁 (西井知紀・上野景三とのパネルディスカッション)

「「そんな小さなこと」だからこそ—「社会」をつくり続ける「運動」—」, 飯田市大学連携会議「学輪IIDA」機関誌『学輪』第3号2016, 2017年1月, 25-29頁

「基調講演 つくる・つながる・暮らし楽しむまち～子ども・若者が主役のまちづくり～」, 北海道教育庁学校教育局高校教育課『平成28年度小中高

一貫ふるさとキャリア教育推進事業連携フォーラムまとめ』, 2016年12月, 2-9頁

「〈社会〉をつくる行政の「学び」化—地方創生と公民館Ⅰ—/〈社会〉をつくる基盤としての公民館—地方創生と公民館Ⅱ—」, 福井県公民館連合会『こうれんふくい』第80号, 2016年11月, 4-5頁

「「まち」をフィールドにすること—「はじめに」に代えて—」, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室院生プロジェクト『「まち」をフィールドにする—「岡さんのいえTOMO」・「街ing本郷」院生プロジェクト報告—/学習基盤社会研究・調査モノグラフ11』, 2016年7月, 1-3頁

「平成25年度全国公民館実態調査について」, 『月刊公民館』平成28年5月号, 2016年5月, 20頁

〈学会・国際会議発表〉

中国

「世界六座学習型都市の企劃と実施策略比較：東京観点」 第四屆終身教育上海論壇：強化終身学習基礎服務能力建設 上海国際会議中心 2016年12月12日 招待講演

台湾

「六個学習型都市の規劃與実施策略的比較探討—東京観点— (Exploring Plans and Strategies of Six World's Learning Cities: Tokyo Perspective)」 2016台北市学習型都市願景国際研討会 台北市政府・台北市立図書館国際会議庁 2016年11月21日—22日 招待講演

「多世代交流與社区的「学習」化」 台日高齢社会世代共融社区交流工作坊 国立中正大学 2016年4月13日—14日 招待講演

「社区的「学習」化與高齢社会的未来—多世代共生和価値多元社会的建設」 高齢社会：創新学習策略国際論壇 国立台湾科学教育館 2016年4月12日 招待講演

韓国

“Making All People Full Members of Society: New Direction of Lifelong Learning in Hyper Aged Society Japan” Seoul 50+ International Forum 2016 “Longevity Revolution, Challenges and Opportunities for 50+ Generation” Seoul City Hall, November 7-8 2016 招待講演

デンマーク

“Making All People Become The Full Member of The

Society: New direction of lifelong learning policy and activities in Japan” 21st Century Skills: ASEM LLLHUB and Danish School of Education, Aarhus University Danish School of Education, Aarhus University, Copenhagen, Denmark, October 3-5, 2016

李 正 連 (准教授)

〈著書〉

李正連 (単著) 「日韓自治体交流の軌跡と展望—川崎市と富川市の教育・文化交流を中心に—」 韓国人研究フォーラム編集委員会 李珉珍・鞠重鎬・李正連編 『国家主義を越える日韓の共生と交流—日本で研究する韓国人研究者の視点—』 明石書店, 2016年6月, pp.136-153.

李正連 (単著) 「韓国の教育改革20年と平生教育」 新海英行・松田武雄編著 『世界の生涯学習—現状と課題』 大学教育出版, 2016年10月, pp.168-181.

〈論文〉

李正連 (単著) 「植民地期朝鮮の夜学と女性の学び—夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—」 アジア教育学会 『アジア教育』 第10号, 2016年9月, pp.15-30.

李正連 「『社会教育』の始発点を探る—旧韓末と植民地時代を中心に—」 京畿道平生教育振興院 『The more』 Vol.19, 2016年12月, pp.50-53. (韓国語)

李正連 (単著) 「日本国立大学の教養教育—東京大学を中心に—」 韓国大学教育協議会 『大学教育』 196号, 2017年3月, pp.34-39. (韓国語)

李正連 『植民地期朝鮮における不就学者の学びと教育支援活動に関する研究—「夜学」を中心に—』 2014~2016年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書(研究代表者:李正連), 2017年3月.

〈学会発表等〉

李正連 「躍動する韓国の生涯学習(平生教育)—市民・地域・学び」 日本社会教育学会第63回研究大会・ラウンドテーブル(コーディネーター), 2016年9月18日, 弘前大学.

新 藤 浩 伸 (准教授)

〈著書〉

北田耕也(監修), 地域文化研究会(編), 『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』, 藤原書店, 2016年11月, 総頁数576(編集委

員および分担執筆).

文化経済学会(日本)(編), 『文化経済学 軌跡と展望』, ミネルヴァ書房, 2016年6月, 総頁数400(編集委員および分担執筆).

中小路久美代, 新藤浩伸, 山本泰裕, 岡田猛(編), 『触発するミュージアム—文化的公共空間の新たな可能性を求めて』, あいり出版, 2016年5月, 総頁数255.

〈論文〉

中小路久美代, 岡田猛, 川嶋稔夫, 山本恭裕, 新藤浩伸, 木村健一, 影浦峯, 「文化的な公共空間における触発する体験」, サービスロジー, 3(2), pp.10-17, 2016年7月

〈学会発表〉

Hironobu Shindo. “Public Halls in Postwar Japan: Stage for Community Music,” 32nd ISME World Conference on Music Education, 25 July 2016, Glasgow.

〈講演等〉

新藤浩伸, 「公会堂—歴史が演出された舞台空間」, 『公会堂—歴史を受け継ぎ, 未来を拓く』~東京・大阪・名古屋“3大公会堂”シンポジウム~, 2017年1月28日, 名古屋市公会堂.

高島知佐子, 水戸雅彦, 真田弘彦(パネリスト), 新藤浩伸(モデレーター), 「公立文化施設が目指す目標と実態の狭間」文化経済学会(日本)2016秋の講演会, 2016年10月29日, 日本大学駿河台キャンパス.

新藤浩伸, 佐藤克明, 「アートマネジメントにおけるワークショップの位置づけをめぐる」, 静岡大学アートマネジメント人材育成のためのワークショップ100 第3回, 2016年7月19日, 静岡大学.

〈書評〉

新藤浩伸, 『内子座』編集委員会編 『内子座 地域が支える町の劇場の100年』学芸出版社, 2016, 文化経済学, 13(2), pp.85-87, 2016年9月.

新藤浩伸, 「東大教師が新入生にすすめる本」, UP, 522, pp.14-15, 2016年4月.

〈その他〉

新藤浩伸, 山崎功, 「対談 地域を元気にする芸術・文化の営み」, 月刊社会教育, 60(3), pp.3-11, 2016年6月.

大学経営・政策コース

小方直幸(教授)

〈雑誌論文〉

立石慎治・小方直幸2016「大学生の退学と留年」『高等教育研究』第19集, 123-143頁。

小方直幸2016「教育社会学における能力の飼い慣らし」『教育社会学研究』第98集, 91-109頁。

〈その他〉

小方直幸2016「質の高い能動的な学び」を引き出すために教員の意識や教育退学率・卒業率を読み解く」『ガイドライン』, 河合塾, 5-6頁。

福留東土(准教授)

〈雑誌論文〉

福留東土「基幹研究大学における先駆的組織改革—九州大学」『文部科学教育通信』405号, 2017年2月, 14-16頁。

福留東土「アメリカの大学における学問の自由と大学の自治—AAUPの活動を中心に—」大桃敏行編『ガバナンス改革と教育の質保証に関する理論的・実証的研究ワーキングペーパー』Vol.3, 2017年2月, 97-110頁。

李麗花・福留東土「産学連携教育の教育的意義に関する考察—IT分野における事例分析を手掛かりに」『大学経営政策研究』第7号, 2017年3月, 73-87頁。

福留東土「米国カーネギー大学分類の分析—高等教育の多様性に関する—考察として—」『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター研究紀要』第2号, 2017年3月, 117-137頁。

福留東土編著『大学院における専門職教育の国際比較研究』広島大学高等教育研究開発センター国際共同研究推進事業ディスカッションペーパーシリーズNo.2, 2017年3月。

〈学会発表〉

福留東土・戸村理「米国リベラルアーツ・カレッジの経営に関する研究—スイートブライヤー・カレッジの閉鎖を巡る動向を事例に—」日本高等教育学会第19回大会, 於追手門学院大学, 2016年6月

福留東土「米国の大学院における専門職教育の改革動向」日本教育社会学会第68回大会・テーマ部会「大学院改革の国際比較」, 於名古屋大学, 2016年9月

Hideto Fukudome, “How to Integrate Research and

Teaching of Academic Professions,” 17th International Conference on Education Research (ICER), Seoul National University, Korea, 2016.10.

〈招待講演〉

福留東土・「アメリカの大学を通して見る大学・教育・職員のあり方」早稲田大学・大学経営セミナー, 2016年12月

両角亜希子(准教授)

〈雑誌論文〉

・両角亜希子「高校の系列化」『IDE 現代の高等教育』579号, 2016年4月, 45-49頁

・両角亜希子「私立大学の統合・連携」『高等教育研究叢書』133号, 2016年7月, 71-85頁

・両角亜希子「大学全体の質向上戦略としての長期計画の実現(事例: 龍谷大学)」『カレッジマネジメント』200号, 2016年9-10月号, 60-63頁

・両角亜希子「入学定員充足率の変動」『IDE 現代の高等教育』584号, 2016年10月, 26-32頁

・両角亜希子・長島万里子「保育の質に対する園長の専門性—保育に関する全国調査から—」『大学経営政策研究』第7号, 2017年3月, 89-104頁

・両角亜希子「高校生の進路選択から見た保育者養成の高学歴化の背景」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第56巻, 2017年3月, 263-271頁

・小林美保・両角亜希子「国立大学教員の教育時間の規定要因」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第56巻, 2017年3月, 139-155頁

・両角亜希子「地方小規模大学の経営と政策の課題」『大学マネジメント』Vol.12 No.12, 2017年3月, 21-27頁

〈口頭発表〉

・両角亜希子「私立大学のガバナンスに関する論点整理」文部科学省 私立大学等の振興に関する検討会議第2回(2016年5月24日, 三田共用会議所)

・両角亜希子「課題研究2 コメント」日本高等教育学会第19回大会(2016年6月24日, 追手門学院大学)

・両角亜希子「私立大学の経営と政策の課題」日本私大教連 私大政策シンポジウム「私大振興のあり方を問う」(2017年1月28日, 日本大学理工学部1号館121)

・両角亜希子・長島万里子「保育者養成の高学歴化に関する研究—機関側の行動から—」東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学セン

ター2016年度関連SEEDSプロジェクト成果報告会(2017年3月5日, 東京大学赤門総合研究棟A200)

- ・両角亜希子「私立大学マネジメントの課題」明治大学高等教育研究センター 高等教育に関する研究会(2017年3月7日, 明治大学)

〈その他〉

- ・両角亜希子, 本間政雄, 松本雄一郎「座談会『大学のミッション経営の意味と意義』」本間政雄『大学のミッション経営-14校の実践事例から学ぶ中長期計画』エデュース学校経営研究所, 2016年7月
- ・両角亜希子「高校卒業時に全てを決めなくても大学進学後にも将来を模索できる」『Kawaijuku Guideline』2016年7-8月, 77-78頁(インタビュー記事)
- ・書評 小川洋著『消えゆく限界大学-私立大学定員割れの構造』(日本経済新聞, 2017年3月4日)
- ・両角亜希子「丸山先生との思い出-私学研究, 大学経営研究のパイオニア-」広島大学高等教育研究センター『大学論集』第49集(丸山文裕教授退職記念), 2017年3月, 25-26頁

教育心理学コース

遠藤利彦(教授)

〈著書〉

- 遠藤利彦(2016). アタッチメントと音楽のあわい. 小西行郎他(編), 乳幼児の音楽表現: 赤ちゃんから始まる音環境の創造(pp.76-79). 中央法規出版.
- 遠藤利彦(2016). アタッチメント理論の新展開: 生涯発達の見座から. 田島信元他(編), 新・発達心理学ハンドブック(pp.140-154). 福村出版.
- 遠藤利彦(2016). 現代における親子・家族関係と乳幼児期からの保育. 佐藤学他(編), 教育・変革への展望3『変容する子どもの関係』(pp.11-42). 岩波書店.
- 遠藤利彦(2016). 心理学徒が脳科学的研究に素朴に思うこと. 日本児童研究所(監修), 児童心理学の進歩2016年版(pp.299-304). 金子書房.
- 遠藤利彦(2016). 子どもの社会性発達と子育て・保育の役割. 秋田喜代美監修, 『あらゆる学問は保育につながる』(pp.225-250). 東京大学出版会.
- 遠藤利彦(2017). 両刃の剣の使い方-感情- 鹿毛雅治(編), パフォーマンスがわかる12の理論

(pp.93-123). 岩崎学術出版.

〈学術誌等論文〉

- 遠藤利彦(2016). アタッチメント理論の「今」を探る. 教育と医学, 761, 2-3.
- 遠藤利彦(2016). アタッチメントとレジリエンスのあわい. 子どもの虐待とネグレクト(日本子ども虐待防止学会機関誌), 17, 329-339.
- 遠藤利彦(2016). アタッチメント理論から見る育児ケア: 子どもが安心して育つために. 医療と保育(日本医療保育学会誌), 14, 58-66.
- 川本哲也・榊原良太・村木良孝・小島淳広・石井悠・遠藤利彦(2016). 体験活動を通じた大学生の社会情緒的発達: 感情制御に着目して. 発達心理学研究(日本発達心理学会誌), 27, 32-46.
- 遠藤利彦(2016). 社会性発達の揺籃としてのアタッチメント: 虐待との関連も視野に入れ. 子どものこころとからだ(日本小児心身医学会誌), 24, 434-436.
- 遠藤利彦(2016). 乳幼児期の保育と教育は表裏一体のものとして在る. 保育通信, 732, 4-9.
- 遠藤利彦(2016). 改めてアタッチメントの概要さと難渋さと思う. 心理治療と治療教育, 27, 75-77.
- 遠藤利彦(2016). 利己と利他のあわい: 社会性を支える感情の仕組み. エモーション・スタディーズ(日本感情心理学会誌), 2, 1-6.
- 遠藤利彦(2016). 非認知的な能力の源にあるアタッチメント. GENKI, 158, 2-14.
- 榊原良太・富塚ゆり子・遠藤利彦(2017). 子ども・保護者との関わりにおける保育士の認知的な感情労働方略と精神的健康の関連. 発達心理学研究, 28, 46-57.
- 遠藤利彦(2017). 親子関係と非認知的な心の発達. 日本教育, 470, 6-9.
- 遠藤利彦(2017). アタッチメント: 子どもの社会情緒的発達. ほいくしんり, 10, 6-17.
- 遠藤利彦(2017). 乳幼児期における“Care”と“Education”の表裏一体性. 発達, 150, 2.

〈報告書〉

- 遠藤利彦(2016). 就学前期におけるアタッチメントと社会情緒的発達. 全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会・文部科学省委託研究『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究-感性・表現の視点から-』報告書.
- 遠藤利彦(統括・代表)(2017). 国立教育政策研究

所・研究プロジェクト（2015～2016）「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究」報告書。

遠藤利彦（2017）. 子育て・子育ての基本について考える：アタッチメントという視座から見る虐待。子ども虐待防止推進全国フォーラム in ふくい・報告書（pp.20-36）. 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策推進室。

〈その他エッセイ・記事等〉

遠藤利彦（2016）. 乳児保育こそが大事，そしておもしろい。エデュカレ，2016年4月号，6-21。

遠藤利彦（2017）. 非認知的な心の力の発達と保育者の役割。保育士会だより，278，2-5. 全国社会福祉協議会・全国保育士会。

遠藤利彦（2017）. 乳幼児期におけるアタッチメントと自己・社会性の発達。東京都公立保育園研究会広報，238，6-20。

遠藤利彦（監修）（2017）. 石川県子育て支援パンフレット「お子さんの安全基地になっていますか」石川県教育委員会。

遠藤利彦（2017）. 人格の土台をつくるアタッチメントの育ち。マッセOSAKA講演集，38，121-147。

遠藤利彦（2017）. 子どもの育ちにおけるアタッチメントとは。乳児保育，184，6-13. 全国乳児福祉協議会。

遠藤利彦（2016-2017）. 『保育ナビ』，2016年4月号～2017年3月号，12回連載。「子どもの非認知的な心の育ちを支えること」「子ども同士のヨコの関係の中で育つ共感性や思いやりの基盤」「好奇心が拡がり，自己のあり方が変わる—中核的自己感から主観的自己感へ」「子どもは相手の身体全体から意図や感情を感じ取る」「不器用さの陰にある共感性や優しさの表現を受けとめる」「自分なりに仮説を立てて確かめる—自発的な楽しい遊びこそが学び」「仲間との複雑な気持ちのやりとりが豊かな心の読み手を育てる」「共感と受容と。子どもは豊かなα機能を備えた大人を求めている」「自己評価的意識の獲得は子どもの社会性の発達の現れ」「大人が発する魅力的なキラーフレーズが子どもの心の発達を下支えする」「0・1・2歳：心の育ちと保育者の専門性：保育者の専門性を考える(1)」「0・1・2歳：心の育ちと保育者の専門性：保育者の専門性を考える(2)」

〈学会等発表〉

草薙恵美子・星信子・安達真由美・安藤寿康・岸玲子・阿部彩・遠藤利彦. 子どもの生育環境と発達—遺伝と環境の相互作用についての新しい視座（大会委員会企画シンポジウム）. 指定討論. 日本発達心理学会第27回大会（北海道大学）. 2016年4月29日—5月1日。

竹下秀子・明和政子・高塩純一・道信良子・竹ノ下祐二・遠藤利彦. 「非定型」の視座から発達進化研究のフレームワークを再考する（発達心理学研究編集委員会企画シンポジウム）. 指定討論. 日本発達心理学会第27回大会（北海道大学）. 2016年4月29日—5月1日。

山崎晃・遠藤利彦・秦野悦子・本郷一夫. 公認心理師法成立後における発達心理学の専門性（日本発達心理学会企画シンポジウム）. 話題提供. 日本発達心理学会第27回大会（北海道大学）. 2016年4月29日—5月1日。

高橋翠・秋田喜代美・遠藤利彦・淀川裕美・西田季利・清水悦子・石井悠・増田まゆみ・中坪史典. 子どもへのかかわりから見える保育者の専門性～食・睡眠・遊び場面に焦点をあてて～（自主企画シンポジウム）. 企画・司会. 日本発達心理学会第27回大会（北海道大学）. 2016年4月29日—5月1日。

石井佑可子・小松佐穂子・白井真理子・川本哲也・利根川明子・榊原良太・遠藤利彦. 情動知性：多層アプローチからの考察. 企画・指定討論. 日本発達心理学会第27回大会（北海道大学）. 2016年4月29日—5月1日。

山内秀雄・千田満・小柴満美子・張山昌論・遠藤利彦・宿谷昌則・坂部貢. 「未来につながる生き生きした情動を育む環境」（企画シンポジウム）. 小講演. 第58回日本小児神経学会学術集会（東京・京王プラザホテル）. 2016年6月3日

遠藤利彦・野澤祥子・島津明人・高橋真由美・高橋翠. 養育者のワークライフバランス（公開シンポジウム）. 企画・指定討論. 日本学術会議主催学術フォーラム「乳児を科学的に観る：発達保育実践政策学の展開」（日本学術会議講堂）. 2016年11月6日。

大豆生田啓友・遠藤利彦・北野幸子・妹尾正教・佐伯胖. 乳児保育の質向上を目指して（日本発達心理学会・保育学会・乳幼児教育学会共催シンポジウム）. 話題提供. 日本発達心理学会第28回大会

(広島大学・広島国際会議場他)。2017年3月25-27日。

数井みゆき・北川恵・小田切紀子・森田展彰・遠藤利彦・北島歩美。男性の養育と家族との関係性(自主企画シンポジウム)。指定討論。日本発達心理学会第28回大会(広島大学・広島国際会議場他)。2017年3月25-27日。

石井佑可子・遠藤利彦・河本愛子・榊原良太・高橋翠。情動知性再考—全人的視座からみる情(へ)の知性—(自主企画シンポジウム)。企画・指定討論。日本発達心理学会第28回大会(広島大学・広島国際会議場他)。2017年3月25-27日。

高橋翠・遠藤利彦・三隅輝見子・淀川裕美・野澤祥子・関智弘・小西行郎・萩原拓。自閉症スペクトラム特性をもつ子どもの保育を考える—生涯にわたるWell-beingの礎となる乳幼児期の発達保障のあり方とは—(自主企画シンポジウム)。司会・指定討論。日本発達心理学会第28回大会(広島大学・広島国際会議場他)。2017年3月25-27日。

〈講演〉

遠藤利彦 招待講演：保育の専門性とは。日本保育協会石川県支部・幼児教育実践研究会(いしかわ子ども交流センター)。2016年6月11日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメント社会性の発達。日本保育士協会講演会(メルパルク横浜)。2016年6月17日。

遠藤利彦 招待講演：発達心理学の立場から考える乳幼児期の心の発達と保育者の役割。平成28年度・とちぎ保育のつどい(とちぎ健康の森)。2016年6月25日。

遠藤利彦 招待講演：子育て・子育ての発達心理学—子どもの気持ちに寄り添うために—。東京都私立幼稚園連盟講演会(アルカディア市ヶ谷)。2016年6月28日。

遠藤利彦 招待講演：愛されて育つ子ども—アタッチメントと社会性の発達。山形県私立幼稚園連盟講演会(メトロポリタン山形)。2016年7月8日。

遠藤利彦 招待講演：保育の基本について考える—アタッチメントと非認知的な心の発達—。H28年度全国保育士養成協議会・北海道ブロック・講演会(札幌ガーデンホテル)。2016年7月9日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと社会性の発達。H28年度千葉市民間保育園協議会講演会(千葉市・きぼーる)。2016年7月15日。

遠藤利彦 招待講演：アタッチメント理論から学ぶ関係性と子どもの社会情緒的発達。静岡県児童心理司等研修会(静岡県庁)。2016年7月22日。

遠藤利彦 基調講演：人生のスタートに良質な教育を：乳幼児期におけるアタッチメントと社会性の発達。H28年度全千葉県私立幼稚園連合会大会(幕張メッセ)。2016年7月15日。

遠藤利彦 基調講演：子どもの育ちにおけるアタッチメントとは？第60回全国乳児院研修会(米子全日空ホテル)。2016年7月27日。

遠藤利彦 招待講演：アタッチメントと子どもの社会情緒的発達：発達臨床的視座を交えながら。三島市発達障害療育支援専門講座講演会(三島市民文化会館)。2016年8月2日。

遠藤利彦 招待講演：両刃なる親の情—ほどよくあるために—。第6回茅ヶ崎市響きあい教育シンポジウム(茅ヶ崎市役所コミュニティホール)。2015年8月9日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児のこころ：子育て・子育ての発達心理学。平成28年度・京都府保育協会保育講演会(京都市男女共同参画センター・ウィングス京都)。2016年9月6日。

遠藤利彦 招待講演：子育て・子育ての基本とは？：アタッチメントが築く心身発達の礎。第7回子育て支援センター全国セミナー2016 in 千葉(明海大学・浦安キャンパス)。2016年9月8日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達。東京都私立幼稚園PTA連合講演会(アルカディア市ヶ谷)。2016年9月12日。

遠藤利彦 招待講演：気になる子がいるから楽しいと思えるクラス経営：子育て・子育ての発達心理学。平成28年度・東京都公立保育園研究会(文京シビック)。2016年10月4日。

遠藤利彦 招待講演：赤ちゃんの力について：養育者との関係が子どもの発達の道筋にどのように影響するか？。足利市保育研究会・全体研修会(足利市民プラザ)。2016年10月14日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児の社会性を育む保育。日本保育協会・全国保育所理事長・所長研修会(函館アリーナ)。2016年10月18日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児のこころの発達における保育者の関わり方。山形県保育協議会・障がい児保育研修会(山形国際ホテル)。2016年10月21日。

遠藤利彦 小講演：実践と研究をつなぐ・保育の質への熱い思いを語る－発達心理学・教育心理学の視点から－。平成28年度東京家政大学・緑苑祭・児童学科保育科シンポジウム（東京家政大学）。2016年10月22日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児の心：アタッチメントと社会性の発達。H28年度千葉県保育協議会講演会（千葉県自治会館）。2016年10月27日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと自己・社会性の発達。H28年度日本保育協会神奈川支部講演会（藤沢市商工会館）。2016年10月27日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと保育者の役割。H28年度入間市保育講演会（入間市役所）。2016年11月2日。

遠藤利彦 招待講演：就学前期におけるアタッチメントと子どもの社会情緒的発達。神奈川県乳児保育講演会（横浜女子短期大学）。2016年11月4日。

遠藤利彦 招待講演：アタッチメントと子どもの社会情緒的発達。三鷹市保育全体研修講演会（三鷹市民会館）。2016年11月4日。

遠藤利彦 招待講演：非認知なるものの発達と教育。日本保育協会石川県支部・幼児教育実践研究会（県社協福祉総合研修センター）。2016年11月12日。

遠藤利彦 招待講演：子どもが幼稚園で学ぶ社会性について。大田区私立幼稚園連盟講演会（プライダルサロンアベア）。2016年11月16日。

遠藤利彦 基調講演：子育て・子育ての基本について考える：アタッチメントという視座から見る虐待。子ども虐待防止推進全国フォーラム in ふくい（福井県生活学習館）。2016年11月19日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと自己・社会性の発達。長崎県里親研修講演会（大村市・社会福祉法人光と緑の園おひさまハウス）。2016年11月26日。

遠藤利彦 招待講演：思春期発達基盤としてのアタッチメント。平成28年度横浜市児童相談所係別研修講演会（横浜中央児童相談所）。2016年12月8日。

遠藤利彦 招待講演：親は子どもにとっての安全基地－ほどよい親であるために－。H28年度入間市市民講演会（入間市役所）。2016年12月9日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと自己・社会性の発達。山口県子育て支援

連絡協議会研修講演会（山口市ニュータナカ）。2016年12月27日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと保育者の役割。大阪市保育連合会・公・民保育施設合同研修講演会（大阪市立中央区民センター）。2017年1月12日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達。群馬県保育ASK講演会（群馬県勤労福祉センター）。2017年1月21日。

遠藤利彦 基調講演：アタッチメント－子どもの社会情緒的発達－。第9回保育心理士研究会（京都市・大谷大学）。2017年1月22日。

遠藤利彦 招待講演：子育て・子育て支援の基本を考える。宮崎県子育て支援連絡協議会研修講演会（宮崎観光ホテル）。2017年2月4日。

遠藤利彦 招待講演：子育て・子育て支援の基本を考える。千歳市専門職員実践講座講演会（千歳市市民文化センター）。2017年2月8日。

遠藤利彦 招待講演：“Care”と“Education”の表裏一体性。お茶の水女子大学附属幼稚園・公開保育研究会（お茶の水女子大学附属幼稚園）。2017年2月10日。

遠藤利彦 招待講演：乳幼児期におけるアタッチメントと自己・社会性の発達。第3回鹿児島市市民公開講座講演会（かごしま市民福祉プラザ）。2017年2月26日。

遠藤利彦 話題提供：“Care”と“Education”の表裏一体性。－非認知的な心の発達と保育者の役割。日本保育協会青年部パネルディスカッション（TKP東京八重洲カンファレンスセンター）。2017年2月28日。

岡田 猛（教授）

〈編著〉

(1) 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛（編）（2016）。「触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて」あいり出版

〈著書、分担執筆〉

(1) 岡田猛（2016）。「触発するコミュニケーションとミュージアム」中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛（編）「触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて」2-10、あいり出版

(2) 新藤浩伸・堀口裕美・岡田猛（2016）。「アメリカのミュージアム・エデュケーションの現状」中

- 小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛 (編) *触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて* 49-67, あいり出版
- (3) 縣拓充・岡田猛 (2016). アーティストの作品創作プロセスを見せる美術展とその効果：「家族の肖像」展と「behind the seen アート創作の舞台裏」展より 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛 (編) *触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて* 94-113, あいり出版
- (4) 中野優子・岡田猛 (2016). 駒場博物館ダンスワークショップ「博物館で踊ろう！体で鑑賞？」の実践とその効果 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛 (編) *触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて* 149-162, あいり出版
- (5) 杉本覚・岡田猛・絹川友梨・川嶋稔夫 (2016). 函館市立博物館におけるワークショップ実践研究 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛 (編) *触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて* 167-185, あいり出版
- (6) 宮田舞・山内保典・岡田猛 (2016). 現代美術で哲学対話 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛 (編) *触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて* 189-207, あいり出版
- (7) Nakano, Y., Shimizu, D., & Okada, T. (2017). Designing a creative dance program for non-dance majors. In A. Manning, (ed.), *Art and design education: Perspectives, challenges and opportunities*, 71-102, Nova science publishers
- 〈論文〉
- (1) 宮田舞・山内保典・岡田猛 (2017). 現代美術に対するイメージの変更を支援する：哲学対話ワークショップの手法を用いた現代美術作品鑑賞の提案 *美術教育学研究*, 49, 393-400.
- (2) 工藤彰・八柘健・小澤基弘・岡田猛・萩生田伸子 (2017). 芸術を専攻しない学生のための省察的表現教育実践：授業感想文のテキストマイニングによる教育的意義と効果の検討 *美術教育学研究*, 49, 145-151.
- (3) Okada, T. & Ishibashi, K. (2016). Imitation, inspiration, and creation: Cognitive process of creative drawing by copying others' artworks. *Cognitive Science*. doi:10.1111/cogs.12442
- (4) 石黒千晶・岡田猛 (2016). 創造的教養を育む芸術教育実践：日常の写真創作活動に及ぼす効果 *認知科学*, 23 (3), 221-236.
- (5) 中小路久美代・岡田猛・川嶋稔夫・山本恭裕・新藤浩伸・木村健一・影浦峽 (2016). 文化的な公共空間における触発する体験 *サービソロジー*, 3, 2, 10-17.
- (6) Ishiguro, C., Yokosawa, K., & Okada, T. (2016). Eye movements during art appreciation by students taking a photo creation course. *Frontiers in Psychology*, 7:1074. doi: 10.3389/fpsyg.2016.01074
- 〈国際学会, 国際シンポジウム発表等〉
- (1) Okada, T. (2016). Fostering artistic creation through encounters outside one's own repertoire. Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (2) Huges, Y. & Okada, T. (2016) Comparison of cognitive process between improvised and scripted acting. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (3) Rutkowski, T., M., Nakano, Y., Shimizu, D., Okada, T. Struzik, Z. (2016). Brain correlates of artistic creative insight: A neurotechnology approach to brainwave decoding. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (4) Takagi, K., Yokochi, S., Okada, T. (2016) How is visual information from drawing utilized by an artist in concept formation? Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (5) Yokochi, S. & Okada, T. (2016) Formation process of young artists' concept for art making: A qualitative analysis of their analogical modification in making art. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (6) Nakano, Y., Shimizu, D., Okada, T. (2016) Designing a creative dance program for non-dance

majors. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016

- (7) Shimizu, D. & Okada, T. (2016) Not deliberate but exploratory: Way of practice of dance experts in creative domain. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (8) Ishiguro, C., & Okada, T. (2016) Development of psychological scales for measuring attitudes for art making and appreciation and their effects on artistic inspiration between art majors and non-art majors. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016
- (9) Wang, S., Takagi, K., Okada, T. (2016) The influence of constraint modification on novices' creativity in drawing with a focus on the subjective perspective of the novices. Poster presented at the Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity Contemporary Issues in Formal and Informal Settings, Tokyo Japan, November 19th, 2016

〈国際シンポジウムの企画〉

Tokyo International Symposium 2016 Art Learning and Creativity: Contemporary Issues in Formal and Informal Settings (Tokyo, Japan), 2016, 11, 19-20, Organizer & Speaker

南風原 朝 和 (教授)

〈著書〉

南風原朝和 (分担執筆), 「検査法」, 高野陽太郎・岡 隆 (編) 『心理学研究法 [補訂版]』, 有斐閣, 2017, pp.236-256.

南風原朝和 (分担執筆), 「共通試験に求められるものと新テスト構想」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構 (編) 『高等教育ライブラリ12 大学入試における共通試験』, 東北大学出版会, 2017, pp.7-23.

〈雑誌論文〉

南風原朝和 (単著), 「高大接続改革の技術的基盤—テスト理論活用の観点から」, 『日本テスト学会誌』第12巻第1号, 2016, pp.94-99.

南風原朝和 (単著), 「新テストのねらいと予想される帰結」, 『指導と評価』第62巻第9号, 2016, pp.21-23.

南風原朝和 (単著), 「2段階選抜の試験方式に問題はないのですか? (回答)」, 『週刊日本医事新報』2016年5月3週号, 2016, p.65.

南風原朝和 (単著), 「共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から」, 第24回東北大学高等教育フォーラム 新時代の大学教育を考える [13] 報告書『大学入試における共通試験の役割—センター試験の評価と新制度の課題』, 2016, pp.7-23.

〈学会発表等〉

南風原朝和 (指定討論), 企画討論会「入試研究と入試改革」, 平成28年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会, 2016.

南風原朝和 (指定討論), 企画セッション「21世紀型スキルの学習環境と評価のありかた」, 日本テスト学会第14回大会, 2016.

針 生 悦 子 (教授)

〈著書〉

Haryu, E., & Kajikawa, S. Japanese children's use of function morphemes during language development. In S. Iwatate, M. Koyasu, & K. Negayama (Eds.), *Frontiers in developmental psychology research: Japanese perspectives* (pp.221-236), Tokyo: Hituzi Syobo Publishing. 総頁数269. 2016年7月.

〈学術論文〉

Jiang, L., & Haryu, E. Chinese-speaking adults' understanding of argument structure. *Japanese Psychological Research*, 58(2), 186-193. 2016年4月.

Haryu, E., & Kajikawa, S. Use of bound morphemes (noun particles) in word segmentation by Japanese-learning infants. *Journal of Memory and Language*, 88, 18-27. 2016年6月.

金重利典・針生悦子・浜名真以・池田慎之介・齋藤友香・山本寿子「ラベル—オブジェクト関係の状況を越えた一貫性の理解: 12か月児における検討」電子通信情報学会技術研究報告 (資料番号 HCS2016-82), 116 (436), 133-138. 2017年1月.

〈学会発表〉

池田慎之介・針生悦子「幼児における発話者の感情の推測」日本発達心理学会第27回大会発表論文集, PF-15, 札幌, 2016年5月.

Haryu, E., Kaneshige, T., Hamana, M., Ikeda, S., & Yamamoto, H. Infants discriminate two types of speech about an object: Labeling an object and expressing an attitude toward the object. *Poster presented at the 20th Biennial International Conference on Infant Studies*, New Orleans, USA. 2016年5月.

Kaneshige, T. & Haryu, E. Infants use facial expressions to predict the expresser's cooperative behavior. *Poster presented at the 20th Biennial International Conference on Infant Studies*, New Orleans, USA. 2016年5月.

針生悦子「子どもの言語学習において助詞など細かな部分が果たす役割」発達基礎科学シンポジウム「赤ちゃんを研究する」東京大学発達保育実践政策学センター 2017年2月.

針生悦子・齋藤友香「養育者による育児語の使用：子どもが生後6～18か月の時期に焦点をあてた横断調査より」日本発達心理学会第28回大会発表論文集, p.387, 広島, 2017年3月.

池田慎之介・針生悦子「児童期における発話からの感情推測」日本発達心理学会第28回大会発表論文集, p.419, 広島, 2017年3月.

齋藤友香・針生悦子「幼児期の配分行動の発達とわり算のインフォーマルな理解」日本発達心理学会第28回大会発表論文集, p.377, 広島, 2017年3月.

〈その他〉

友永雅己・三浦麻子・針生悦子「心理学の再現可能性：我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか —特集号の刊行によせて—」心理学評論, 59(1), 1-2. 2016年8月.

優秀論文賞 (日本心理学会) 2016年11月.

植 阪 友 理 (助教)

〈書籍〉

Jamnik, M., Uesaka, Y., & Schwartz, E. S. (Eds.) (2016). Diagrammatic Representation and Inference. *Lecture Notes in Artificial Intelligence*. Vol.9781. Springer: Switzerland.

市川伸一・植阪友理 (編著) (2016). 『教えて考えさせる授業小学校—深い学びとメタ認知を促す授業プラン—』図書文化：東京

植阪友理 (2016) 11章 教師の専門性を高める「子どものつまずき」に応じた指導—個別学習指導

(認知カウンセリング) から一斉授業まで—SRL研究会 (編) 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術 北大路書房 pp.157-177

〈査読つき学術雑誌論文〉

Uesaka, Y., Igarashi, M., Suetsugu, R. (2016). Promoting multi-perspective integration as a 21st century skill: The effects of instructional methods encouraging students' spontaneous use of tables for organizing information. *Lecture Notes in Artificial Intelligence (LNAI)*, Vol.9781, 172-186. (査読あり)

Manalo, E., & Uesaka, Y. (2016). Hint, instruction, and practice: The necessary components for promoting spontaneous use in students' written work? *Lecture Notes in Artificial Intelligence (LNAI)*, Vol.9781, 157-171. (査読あり)

深谷達史・植阪友理・田中瑛津子・篠ヶ谷圭太・西尾信一・市川伸一 (2016) 高等学校における教えあい講座の実践—教えあいの質と学習方略に対する効果 教育心理学研究, 64, 88-84. (査読あり)

〈その他の論文〉

植阪友理・五十嵐美加・末次伶 (2016) 「教えて考えさせる授業」による生徒の議論力の向上 植阪友理・マナロ エマニュエル (編) 『深い学びに向けた心理学の挑戦：21世紀に向けた学力と学習—学習方略プロジェクトH27年度の研究成果—』 *Working Papers*, Vol.5, 5-17.

植阪友理・武田直美・吉澤佳子・繁定絢・高橋靖子・福井佳枝・浅越有紀・高橋徳子・赤松百合子 (2016) 『子どもの育ちを支える絵本選びを促す研修プログラムの開発と保育実践への展開——ある公立幼稚園における地域・大学との協同実践研究の記録——』第2回サセス保育・幼児教育研究懸賞論文 (優秀論文賞受賞)

植阪友理・マナロ・エマニュエル (編著) (2016) 『深い学びに向けた心理学の挑戦：21世紀に向けた学力と学習—学習方略プロジェクトH27年度の研究成果—』 *Working papers*, Vol.5, 東京大学：東京. <http://hdl.handle.net/2261/72558>

植阪友理・大石和正 (編著) (2016) 『国語科における「教えて考えさせる授業」の実践：平成27年度袋井市立高南小学校の挑戦』東京大学：東京. <http://hdl.handle.net/2261/59391>

〈学会における口頭発表および招待講演〉

Uesaka, Y., Igarashi, M., Suetsugu, R. (2016, July). *Argumentation Skills for Living in the 21st Century:*

- Instructional Methods to Promote the Quantity and Quality of Students' Dialectical Argumentation. Orally presented at 31st international congress of psychology (ICP2016), Yokohama, Japan. (査読あり)
- Uesaka, Y., Fukaya, T., Ichikawa, S. (2016, July). Integration of Discovery Learning and Direct Instruction in a Class: Applying the "Thinking-after-instruction" Approach in a Mathematics Class and Examining the Effects on Students' Performance and Teachers' Instructional Strategies. Orally presented at 31st international congress of psychology (ICP2016), Yokohama, Japan. (査読あり)
- Dryer, R., Manalo, E., Uesaka, Y., Tyson, G. A. (2016, July). Cross-cultural examination of Australian and Japanese female university students' beliefs about the treatment of Bulimia Nervosa. Orally presented at 31st international congress of psychology (ICP2016), Yokohama, Japan. (査読あり)
- Manalo, E., & Uesaka, Y. (2016, August). Hint, instruction, and practice: The necessary components for promoting spontaneous use in students' written work? Orally presented at the 9th International conference of Diagrams (Diagrams 2016), Philadelphia, USA (査読あり)
- Uesaka, Y., Igarashi, M., Suetsugu, R. (2016, August). Promoting multi-perspective integration as a 21st century skill: The effects of instructional methods encouraging students' spontaneous use of tables for organizing information. Orally presented at the 9th International conference of Diagrams (Diagrams 2016), Philadelphia, USA (査読あり)
- 植阪友理 (2016年10月)「理論と実践を結ぶREALアプローチの提案と展開」自主シンポジウム「教育心理学における『21世紀型研究スキル』を探る－教育実践を造りながら研究を生み出す－」における話題提供 日本教育心理学会第58回総会 pp.61, サポートホール高松
- 植阪友理 (2016年10月)「行動データを用いた学習方略の測定」自主シンポジウム「自己調整学習を測定するためのアプローチ－学習行動, 学習方略, 動機づけを対象に－」における話題提供 日本教育心理学会第58回総会 pp.33, サポートホール高松
- 植阪友理 (2016年10月)「学習方略の自発的利用を教育」自主シンポジウム「学校教育における活用力の育成－知識の文脈依存性を超えるための心理的メカニズムと方法－」における話題提供 日本教育心理学会第58回総会 pp.10, サポートホール高松
- 植阪友理・武田直美・吉澤佳子・赤松百合子 (2016年5月)『暗黙知としての育ちを支える絵本選びの視点をどう共有するか－子どもの成長を支える絵本選びを促す研修プログラムの開発と保護者への広がり話をに－』日本発達心理学会, ラウンドテーブル
- 植阪友理 (2016) 中高一貫した「教えて考えさせる授業」で学びの変革を 呉市立川尻中学校 (川尻地区公開研究発表), 10月29日 (招待講演)
- 〈学会におけるポスター発表〉**
- 植阪友理 (2016年10月) 認知カウンセリングの診断・指導技術の向上－ロールプレイ型研修の提案と試行的実践－ 日本教育心理学会第58回総会 サポートホール高松
- 深谷達史・植阪友理・市川伸一 (2016年10月)『教えて考えさせる授業』の効果検証－中学生に対する理科の実験授業から－ 日本教育心理学会第58回総会, pp.509, かがわ国際会議場
- 植阪友理・武田直美・吉澤佳子・浅越有紀・繁定 絢・高橋靖子・福井佳枝・高橋徳子・赤松百合子 (2016年9月) 子どもの成長を支える絵本選びを促す研修プログラムの開発と効果－幼稚園での実践と保育場面における遊びの質の向上－ 日本教育工学会第32回全国大会 大阪大学
- 植阪友理・高橋徳子・繁定 絢・福井佳枝・草地沙織・小川浩美・吉澤佳子・高橋靖子・浅越有紀・赤松百合子 (2016年9月) 子どもの育ちを支える絵本選びを促す研修プログラムの開発とその効果の分析 発達保育実践政策学センター主催セミナー「中国の保育・幼児教育の質保障・向上の政策と取り組み」におけるシンポジウム
- 植阪友理 (2016年10月) 認知カウンセリングの診断・指導技術の向上－ロールプレイ型研修の提案と試行的実践－ 日本教育心理学会第58回総会 pp.504, サポートホール高松
- 植阪友理・吉澤佳子・武田直美・繁定 絢・高橋靖子・福井佳枝・浅越有紀・高橋徳子・赤松百合子 (2016年4月) 子どもの成長を支える絵本選びを促す研修プログラムの開発－「教えて考えさせる授業」を援用した研修が保育者・保護者に及ぼす影響に着目して－ 日本発達心理学会第27回

大会 北海道大学

〈賞罰〉

2016年7月 第2回サクセス保育・幼児教育研究懸賞論文優秀論文賞（「子どもの育ちを支える絵本選びを促す研修プログラムの開発と保育実践への展開——ある公立幼稚園における地域・大学との協同的実践研究の記録——」に対する受賞）

臨床心理学コース

下山晴彦（教授）

〈編著〉

下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳（編著）必携 発達障害支援ハンドブック 金剛出版

下山晴彦・中嶋義文（編著）2016 pp530. 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法 医学書院 2016 pp345.

〈訳書〉

本間生夫・下山晴彦（監訳）マインドフルネスのすべてー「今この瞬間」への気づきー 丸善 2016 pp250. (Susan L.Smalley & Diana Einston 2010 Fully Present: The Science, Art, and Practice of Mindfulness. Da Capo Press.)

〈分担執筆〉

下山晴彦 ケース・フォーミュレーション 下山晴彦・中嶋義文（編著）公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法 医学書院 2016 pp178-180.

下山晴彦 自閉スペクトラム症の発達促進・心のケアのための心理的技法 金生由紀子・渡辺慶一郎・土橋圭子（編）新版自閉スペクトラム症の医療・療育・教育 金芳堂 2016 pp171-183.

下山晴彦 心理職の役割とスキル 下山晴彦・中嶋義文（編著）公認心理師 必携 精神医療・臨床心理の知識と技法 医学書院 2016 pp170-172.

下山晴彦 発達障害研究の意義と役割 下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳（編著）必携 発達障害支援ハンドブック 金剛出版 2016 pp165-168.

〈雑誌論文：査読有〉

安 婷婷・菅沼慎一郎・小倉加奈子・下山晴彦 インターネットを用いた認知行動療法の最新のレビューと今後の展望 臨床心理学, 2016, 16(2), 219-231.

藤尾末由希・金生由紀子・松田なつみ・野中舞子・河野稔明・下山晴彦 衝動性を有するトゥレット

症候群の子どもの保護者の心理過程 臨床心理学, 2016, 16(6), 723-732.

羽澄 恵・能登 眸・川崎 隆・榎原 潤・高木郁彦・下山晴彦 他職種との協働の現状に対する臨床心理士の認識—実践経験の長さに伴う特徴に注目して—心理臨床学研究, 2016, 33(6), 556-567.

菅沼慎一郎・平野真理・中野美奈・下山晴彦 日本盤Warwick-Edinburgh Well-being Scale (WEMWBS)の作成と信頼性・妥当性の検討 臨床心理学, 2016, 16(4), 471-475.

堤 亜美・下山晴彦 中学生を対象とした抑うつ予防心理教育プログラムの試行—チームティーチング実践と心理士単独実践の比較を通して— 臨床心理学, 2016, 16(6), 713-722.

〈雑誌論文：査読無〉

下山晴彦 伝統文化、魂の癒し、日本文化、そしてマインドフルネス 精神療法, 2016, 42(4), 540-542.

下山晴彦 臨床研究 臨床心理学, 臨時特別増刊号, 2016, 135-141.

下山晴彦・小倉加奈子 深層的心理療法と認知行動療法の組み合わせ—遊戯療法・箱庭療法・描画と曝露反応妨害法の交錯するところ— 精神療法, 2016, 42(2), 193-200.

井原祐子・シュレンベル レナ・安 婷婷・下津佐 綾・下山晴彦 医師のメンタルヘルスと今後の課題 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2017, 40, 000-000.

小林奈央・上田麻美・樋口紫音・大井葉月・下山晴彦 がん患者の「身体に纏わる苦痛」における心理的介入, 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2017, 40, 000-000.

大賀真伊・浦野由平・北原祐理・下山晴彦 ARMSにおける認知的介入の作用メカニズムに関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2017, 40, 030-036.

恩田 豪・信吉真璃奈・山本瑛美・館野弘樹・平林佳奈・下山晴彦 学校適応感研究の現状と今後の展望 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2017, 40, 037-044.

鈴木拓朗・荻原 萌・糸山恵未・下山晴彦 うらみ研究の概観と今後の課題 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2017, 40, 053-061.

上田 翠・浜村俊傑・中村杏奈・下山晴彦 衝動性に関する遺伝環境交互作用—動物研究の応用可能

性一 東京大学大学院教育学研究科紀要, 2017, 40, 022-029.

〈学会発表〉

- Fujio, M., Kano, Y., Matsuda, N., Nonaka, M., Kono, T., Nobuyoshi, M., & Shimoyama, H. The investigation into the changes of subjective urges in people with Tourette Syndrome. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Hirano, M., Ogura, K., Sakamoto, D., Iwano, Y., Yamashita, Y., Tsuchida, T., Sukanuma, S. & Shimoyama, H. Interaction at home between a human and a talking cleaning robot as an apprentice counsellor. The 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Nakano, M., Sukanuma, S. & Shimoyama, H. Development and implementation of a three-day ICT-based mental health learning program. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Nobuyoshi, M., Kano, Y., Matsuda, N., Fujio, M., & Shimoyama, H. Reliability and validity of Japanese version of the Sensory Gating Inventory (SGI). 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Ogura, K., Hirano, M., Sakamoto, D., Iwano, Y., Yamashita, Y., Tsuchida, T., Sukanuma, S. & Shimoyama, H. Difference of emotional self-regulation behavior by mental state. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Ooue M. What is Japanese elderly's emptiness (Munashisa)?: a text analysis of free descript answers. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Ooue M., Yamamoto E., Sukanuma S., Shimoyama H. Possibilities and limits of mindfulness approach in Japan: A consideration of the mindfulness-based iPhone application. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Sukanuma, S. & Shimoyama, H. The psychological intervention of cognition in resignation through mobile application. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016
- Urano, Y., Sukanuma, S., & Shimoyama, H. Development of an iPhone application focusing on the experience

of "akirameru": Verifying its effect on mental health using qualitative data. 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター) 2016

高橋美保(教授)

〈著書〉

- 高橋美保(分担執筆), 「第4章「組織のメンタルヘルスと体制作り」と「再就職支援」の最前線—現場からのモデルづくり, ビジョン作りをめぐる—」, 新田泰生・足立智昭(編), 『心理職の組織への関わり方 産業心理臨床モデルの構築に向けて』, 誠信書房, 2016, 130-151.
- 高橋美保(分担執筆), 「第3世代認知行動療法」, 下山晴彦・中嶋義文(編), 『公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法』, 医学書院, 2016, 210-211.
- 高橋美保(分担執筆), 「森田療法・内観療法」, 下山晴彦・中嶋義文(編), 『公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法』, 医学書院, 2016, 215-216.
- 高橋美保(分担執筆), 「コンサルテーション」, 下山晴彦・中嶋義文(編), 『公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法』, 医学書院, 2016, 228-229.
- 高橋美保(分担執筆), 「危機介入」, 下山晴彦・中嶋義文(編), 『公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法』, 医学書院, 2016, 229-230.

〈雑誌論文〉

- 高橋美保(単著), 「内観療法の作用機序に関する一考察」, 『内観研究』, 22-1, 2016, pp.47-57.
- 高橋美保(単著), 「企画特集: コミュニティ心理学の教育実践 コミュニティ心理学教育はどうあるべきか—方法論に注目した特集の企画趣旨—」, 『コミュニティ心理学研究』, 20-2, 2017, 121-128.
- 高橋美保(共著), 「MBCTのプログラムとしての治療的要素—体験に基づく探索的検討—」, (稲吉玲美氏・勝又結菜氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 56, 2017, 13-26.
- 高橋美保(共著), 「マインドフルネス実践が月経随伴症状に与える影響に関する探索的検討—主観的体験の変化に着目して—」, (稲吉玲美氏・生崎文乃氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 40, 2017, 95-103.
- 高橋美保(共著), 「成人ASD者の就労に関わる支援

者の困難感への対処法」, (原さなみ氏・田川薫氏・神辺明香里氏・齋藤さらさ氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 40, 2017, 104-113.

高橋美保 (共著), 「国家資格としての心理職の法的責任の検討」, (伴恵理子氏・勝又結菜氏・野村佳申氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 40, 2017, 87-94.

高橋美保 (共著), 「ワーク・ライフ・バランスとは何か―育児と仕事に携わる人が望むもの」, (石黒香苗氏・植竹智香氏・馬場絢子氏・島津明人氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 40, 2017, 78-86.

高橋美保 (単著), 「マインドフルネスが心理療法にもたらすもの―内観療法との関連から」, 『精神療法』, 215, 2016, 483-490.

高橋美保 (共著), 「研究会企画シンポジウム3 発達障害者の就労に向けた学習と支援―多面的なアセスメントに基づいて―」, (湯澤正通氏・池谷彩氏・湯澤美紀氏・村山光子氏・黒田美保氏との共著), 『教育心理学年報』, 55, 295-303.

〈学会発表〉

Takahashi, M. and Suzuki, Y. (Poster presentation), The development of a program to improve life-career resilience for job seekers with disabilities, The 31st International Congress of Psychology, 2016.

Katsumata, Y., Nakatani, H. and Takahashi, M. (Poster presentation). Brain structural / functional relationship between meta-cognitive skill and rumination: A MRI study The 31st International Congress of Psychology, 2016.

Baba, A. and Takahashi, M. (Poster presentation). Examining Mental Strain of Group Home Care Providers in Working with People with Mental Disorders The 31st International Congress of Psychology, 2016.

高橋美保・馬場絢子 (ポスター発表). マインドフルネスが高齢者のWell-beingに及ぼす影響―社会的接触(互助)とセルフヘルプ(自助)の検討, 第19回日本コミュニティ心理学会, 2016.

〈シンポジウム等〉

高橋美保 (講演者), 埼玉県西部地区2016年障がい者ワークフェスタ “自分らしい人生を歩むために”ライフキャリア・レジリエンスに注目して, 2016.

高橋美保 (講演者), 平成28年度市民後見人養成講座 “対人援助の基礎”, 2016.

高橋美保 (講演者), “内観療法の作用機序―臨床心理学の視点から―”日本心理医療諸学会連合 (UPM) 第29回大会講習会, 2016.

高橋美保 (指定討論者), 日本心理臨床学会第35回秋季大会口頭発表 (事例研究) OA3 “職業体験プログラムが発達障害学生の自己理解に及ぼす影響―職業準備性アセスメントにより自己理解が進んだ事例”, 2016.

〈その他の業績〉

高橋美保 (単著), 「貝谷久宜・熊野宏昭・越川房子 (編著) マインドフルネス 実践と基礎 (書評)」, 『精神療法』, 215, 2016, pp590-591.

高橋美保 (単著), 「Paul E. Flaxman, Frank W. Bond, Fredrik Livheim, Steven C. Hayes, 武藤崇・土屋政雄・三田村仰 (監訳), マインドフルにいきいき働くためのトレーニングマニュアル―職場のためのACT (書評)」, 『精神療法』, 42-1, 2016, pp.114-115.

能智正博 (教授)

〈著書〉

Nochi, M. (分担執筆) Qualitative research in Japan. In Japan Society of Developmental Psychology (ed.) *Frontiers in developmental psychology research: Japanese perspective*, Hituji Shobo, 2016, pp.81-96

〈学術論文〉

能智正博 (単著) 障害と自己の意味を継続的に更新する失語症の事例―20年にわたる語りの変遷から―. *The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine*, 53, 941-944. 2016

能智正博・金智慧・真柄翔太 (共著) 全盲児の成長と療育過程の縦断的分析 (1): 1歳から2歳まで 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 50-57. 2016

園部愛子・川上侑希子・能智正博 (共著) 全盲児の成長と療育過程の縦断的分析 (2): 3歳から6歳まで 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 58-65. 2016

松下弓月・川上侑希子・真柄翔太・能智正博 (共著) 臨床心理学的実践の学びにおける質的研究の意義 (1) 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 66-73. 2016

横山克貴・堀内多恵・古井 (橋本) 望・能智正博 (共

著) 臨床心理学的実践の学びにおける質的研究の意義 (2) 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 74-81. 2016

広津侑実子・能智正博 (共著) ろう者と聴者の出会いの場におけるコミュニケーションの方法—手話を用いたインタビューの会話分析から— 質的心理学研究, 15, 124-141. 2016

〈翻訳〉

クヴァール, S. 『質的研究のための「インター・ビュー」』新曜社 (徳田治子との共訳) 2016

〈学会発表〉

やまだようこ・サトウタツヤ・能智正博・長崎勤・杉村伸一郎 (司会・指定討論) 発達心理学と生涯発達心理学の断絶を超えて—質的心理学は何かができるか?—日本発達心理学会第28回大会 広島 2017 3月

志茂田誠・安田美彌子・能智正博・根本昌彦・深田邦子・池田真理 (シンポジスト) 「人は何を求めているのか」—その理解とケアを考える— 日本「祈りと救いとこころ」学会第3回学術研究大会 東京 (抄録集p10-14) 2016 11月

能智正博・園部愛子・金智慧・川上侑希子・眞柄翔太 (ポスター発表) 先天性盲児の自己像の初期発達—療育場面の映像の質的分析から— 日本教育心理学会第58回総会 香川 2016 10月

Tanaka, S., Applebaum, M., Ueda, K., Ferrarello, S., Nochi, M. (話題提供) Human science and phenomenology: Reconsidering the approach to experiences of others. 77th Meeting for Meta-theoretical Studies of Mind Science/ 5th Research Meeting for Embodied Approach. Tokyo 2016, July

Nochi, M., Yamada, Y., Yamori, K., Sato, T., Han, G. Q., & Valsiner, J. (企画・司会), Development of qualitative psychology in Japan: What can we contribute to the world? The 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (Program, p.281) 2016, July

Bamberg, M., Watzlawik, M., Nochi, M., Hosaka, Y., & Laetsch, D. C. (話題提供) Identity and identity research in psychology and neighboring discipline. The 31st International Congress of Psychology, Yokohama. (Program, p.164) 2016, July

〈講演・講座〉

能智正博 質的研究法入門 日本臨床心理士会臨床心理センター講座35 東京 2017 3月

能智正博 ランチョンセミナー: “病いの語り”のとなえかた 第20回日本摂食障害学会学術集会 東京 2016 9月

〈その他〉

能智正博・沖濱真治・石橋太加志 附属中等教育学校における卒業研究指導の現状と課題の探求 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター研究紀要, 2, 198-206 2017

能智正博 (書評) 「エヴィデンス」再生に向けての確かな歩み 小林隆児・西研 (編) 『人間科学におけるエヴィデンスとは何か』(新曜社) 飢餓陣営, 44, 182-183. 2016

能智正博 (書評) 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(伊藤亜紗著, 光文社) 心と社会, 47(2), 132-133 2016 6月

野中舞子 (特任助教)

〈雑誌論文〉

Matsuda N, Kono T, Nonaka M, Fujio M, Kano Y. (共著), 「Self-initiated Coping with Tourette's Syndrome: Effect of Tic Suppression on QOL」, 『Brain and Development』第38号, 2016, pp.233-241.

藤尾未由希・金生由紀子・松田なつみ・野中舞子・河野稔明・下山晴彦 (共著) (2016). 「衝動性を有するトゥレット症候群の子どもの保護者の心理過程」, 『臨床心理学』, 第16号, (2016) pp.723-732.

〈学会発表〉

Garcia-Delgar, B., Luber, M., Moyano, M.B., de Larrechea A., Kano, Y., Nonaka, M., Morer, A., Redondo, M. Coffey B.J. (学会発表). Depression and Anxiety in Children and Adolescents with Tourette's Disorder: An International Perspective. AACAP's 63th Annual Meeting, New York. 2016.

Fujio, M., Kano, Y., Matsuda, N., Nonaka, M., Kono, T., Nobuyoshi, M., & Shimoyama, H. (学会発表). The investigation into the changes of subjective urges in people with Tourette Syndrome. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.

Kano, Y., Fujio, M., Kaji, N., Matsuda, N., Nonaka, M. & Kono, T. (学会発表). Change of Sensory Phenomena and Related Features in Clinical Course of Tourette Syndrome. The 22nd International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions World Congress, Calgary, 2016.

身体教育学コース

佐々木 司 (教授)

(著書)

佐々木司, 岩見千景, 道上恵美子 (共著) (2016) 過呼吸 (過換気) 症候群への対応. (毎日の勤務とその工夫. 第一法規)

(雑誌論文)

Fujikawa S, Ando S, Shimodera S, Koike S, Usami S, Toriyama R, Kanata S, Sasaki T, Kasai K, Okazaki Y, Nishida A (2016) The association of current violence from adult family members with adolescent bullying involvement and suicidal feelings. *PLoS ONE* 11(10):e0163707.

種市撰子, 東郷史治, 小塩靖崇, 北川裕子, 佐々木司. (2016) 抑うつと心肺持久力との関連: 疫学研究の知見から. *産業精神保健* 24: 387-392.

Fujisawa TX, Nishitani S, Iwanaga R, Matsuzaki J, Kawasaki C, Tochigi M, Sasaki T, Kato N, Shinohara K. (2016) Association of Aryl Hydrocarbon Receptor-Related Gene Variants with the Severity of Autism Spectrum Disorders. *Front Psychiatry*; 7:184.

小塩靖崇, 芦川恵美, 道上恵美子, 布山タルト, 大沼久美子, 種市節子, 東郷史治, 佐々木司 (2016) 学校の教員向けメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの効果検証. *精神科* 29(4): 358-366.

Otowa T, Kawamura Y, Tsutsumi A, Kawakami N, Kan C, Shimada T, Umekage T, Kasai K, Tokunaga K, Sasaki T (2016) The first pilot genome-wide gene-environment study of depression in the Japanese population. *PLoS ONE* 11(8):e0160823.

Kanata S, Koike S, Ando S, Nishida A, Usami S, Yamasaki S, Morimoto Y, Toriyama R, Fujikawa S, Sugimoto N, Sasaki T, Furukawa TA, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K. (2016) Enuresis and Hyperactivity-Inattention in Early Adolescence: Findings from a Population-Based Survey in Tokyo (Tokyo Early Adolescence Survey). *PLoS ONE* 11(7):e0158786.

Yamasaki S, Ando S, Shimodera S, Endo K, Okazaki Y, Asukai N, Usami S, Nishida A, Sasaki T (2016) The recognition of mental illness, schizophrenia identification, and help-seeking from friends in late adolescence. *PLoS ONE*. 11(3):e0151298.

Shimada-Sugimoto M, Otowa T, Miyagawa T, Khor SS, Omae Y, Toyo-Oka L, Sugaya N, Kawamura

Y, Umekage T, Miyashita A, Kuwano R, Kaiya H, Kasai K, Tani H, Okazaki Y, Tokunaga K, Sasaki T (2016) Polymorphisms in the TMEM132D region are associated with panic disorder in HLA-DRB1*13:02-negative individuals of a Japanese population. *Hum Genome Var* 25; 3:16001.

Yamasaki S, Ando S, Koike S, Usami S, Endo K, French P, Sasaki T, Furukawa TA, Hasegawa-Hiraiwa M, Kasai K, Nishida A. (2016) Dissociation mediates the relationship between peer victimization and hallucinatory experiences among early adolescents. *Schizophrenia Research: Cognition* 4:18.

北川裕子, 佐々木司 (2016) タブレット端末を活用した思春期児童生徒の精神保健アセスメントの試み: 保健室での模擬実施で得られた評価の報告. *精神科* 29: 63-72.

Ojio Y, Nishida A, Shimodera S, Togo F, Sasaki T (2016) Sleep duration associated with the lowest risk of depression/anxiety in adolescents. *SLEEP* 39:1555-62.

Miyagawa T, Yamasaki M, Toyoda H, Khor S-S, Liu X, Kuwabara H, Kano Y, Shimada T, Sugiyama T, Nishida H, Sugaya N, Tochigi M, Otowa T, Okazaki Y, Kaiya H, Kawamura Y, Miyashita A, Kuwano R, Kasai K, Tani H, Sasaki T, Honda M, Tokunaga K (2016) Evaluation of polygenic risks for narcolepsy and essential hypersomnia. *J Hum Genet* 61(10):873-878.

(以上: 査読あり, 以下: 査読無し)

佐々木司 (2016) 統合失調症の周産期リスク. *精神科臨床Legato* 2(3); 122-126.

櫻井芽久美, 佐々木司 (2016) 小規模多機能型居宅介護を中心とした地域包括ケア. *精神科* 29: 55-57.

小塩靖崇, 佐々木司 (2016) 専門家として学校教員とどう関わるか: 教員の潜在力を呼び覚ます保健教育の出發を. *体育科教育* 64(6): 36-39.

小塩靖崇, 芦川恵美, 道上恵美子, 大沼久美子, 種市撰子, 佐々木司. (2016) 学校教育で精神疾患を教えることの意義と課題. *精神科治療学* 31(4); 465-470.

佐々木司 (2016) こころの健康, 特に「10代の自殺死亡率」問題を中心に. *母子保健情報誌* 1:14-20.

多賀 巖太郎 (教授)

〈雑誌論文〉

- Y. Kobayashi, H. Watanabe, G. Taga: Movement patterns of limb coordination in infant rolling. *Experimental Brain Research* 234, 3433-3445, 2016
- H. Oohashi, H. Watanabe, G. Taga: Acquisition of vowel articulation in childhood investigated by acoustic-to-articulatory inversion. *Infant Behavior and Development* 46, 178-193, 2017
- H. Watanabe, Y. Shitara, Y. Aoki, T. Inoue, S. Tsuchida, N. Takahashi, G. Taga: Hemoglobin phase of oxygenation and deoxygenation in early brain development measured using fNIRS. *Proc. Natl. Acad. Sci. U.S.A.* E1737-E1744, 2017

〈その他〉

G. Taga, A model of hemoglobin phase of oxygenation and deoxygenation (hPod) in spontaneous neurovascular and metabolic activity. fNIRS2016, Paris, France, Oct 13-16, 2016

多賀巖太郎, 為末大, 浅田稔, 高塩純一: 人はなぜ動くのか?—スポーツ, 発達, リハビリテーション, ロボット工学のクロストーク, 日本赤ちゃん学会第16回学術集会, 同志社大学, 京都, 2016.5.22

多賀巖太郎: ヒト脳の形態と機能の発達 第17回南部コロキウム 大阪大学, 大阪, 2016.7.14

多賀巖太郎・渡辺はま: hPod: 脳組織ヘモグロビン酸素化動態の位相情報, 日本光脳機能イメージング学会第19回学術集会, 星稜会館, 東京, 2016.7.23

多賀巖太郎: 人間発達の普遍性と固有性, 研究会「物理的普遍性から生物学的普遍性へ」, 東京大学, 東京, 2016.8.4

多賀巖太郎: ヒトの初期発達における睡眠, 日本学術会議主催フォーラム 乳児を科学的に観る: 発達保育実践政策学の展開, 日本学術会議講堂, 東京, 2016.11.6

多賀巖太郎: 「赤ちゃん物理学」, CEDEPシンポジウム赤ちゃんを研究する, 東京大学, 東京, 2017.1.30

多賀巖太郎 fNIRSにおけるhPodを用いた脳の発達研究, 第47回脳科学ライフサポート研究センターセミナー, 電気通信大学, 東京, 2017.3.9 (招待)

多賀巖太郎: 発達脳科学から見た身体のダイナミクス, 日本発育発達学会第15回大会, 岐阜大学, 岐阜, 2017.3.17 (招待)

野崎 大地 (教授)

〈雑誌論文〉

1. Nozaki D, Yokoi A, Kimura T, Hirashima M, Orban de Xivry J-J. Tagging motor memories with transcranial direct current stimulation allows later artificially-controlled retrieval. *eLife* 5:e15378 2016.
2. Hayashi T, Yokoi A, Hirashima M, Nozaki D. Visuomotor map determines how visually guided reaching movements are corrected within and across trials. *eNeuro* 3:e0032-16, 2016.
3. Hayashi T, Nozaki D. Improving a bimanual motor skill through unimanual training. *Frontiers in Integrative Neuroscience*. Vol.10. pp.1-13. 2016.

〈国際会議〉

1. Sasaki A, Nozaki D. Short-term maintenance of motor memory induced by memory retrieval. *Society for Neuroscience*. San Diego, USA. 11/2016
2. Hayashi T, Takiyama K, Nozaki D. Rotation of preferred direction of motor primitive explains the dependence of shape of visuomotor map on visuomotor adaptation rate. *Society for Neuroscience*. San Diego, USA. 11/2016
3. Nozaki D. Visuomotor map determines online and offline movement corrections. *Cosyne 2017 Workshop*. Snowbird, USA. 2/2017

〈国内発表〉

1. 加藤悠太郎, 野崎大地. 運動学習における視覚と固有感覚情報の統合様式について. *Motor Control研究会*. 慶應義塾大学. 9/2016
2. 佐々木彰一, 野崎大地. 運動記憶想起が促す記憶の短期的維持効果. *Motor Control研究会*. 慶應義塾大学. 9/2016
3. 林拓志, 瀧山健, 野崎大地. 運動プリミティブの至適方位の回転による運動学習基盤の再構成. *Motor Control研究会*. 慶應義塾大学. 9/2016

東郷 史治 (准教授)

〈雑誌論文〉

Togo, F. (共著), 「Associations of depressive symptoms and morningness-eveningness, sleep duration, and rotating shift work in Japanese nurses」, (T. Yoshizaki, T. Komatsu氏との共著), 『*Chronobiology International*』第34巻, 2017, p.349-359.

Togo, F. (共著), 「Association of eating behaviors with diurnal preference and rotating shift work in Japanese

female nurses: a cross-sectional study], (Yoshizaki, T., Y. Kawano, O. Noguchi, J. Onishi, R. Teramoto, A. Sunami, Y. Yokoyama, Y. Tada, A. Hida氏との共著), 『BMJ open』 第6巻, 2016, doi: 10.1136/bmjopen-2016-011987.

Togo, F. (共著), 「Noisy galvanic vestibular stimulation induces a sustained improvement in body balance in elderly adults」, (Fujimoto, C., Y. Yamamoto, T. Kamogashira, M. Kinoshita, N. Egami, Y. Uemura, T. Yamasoba, S. Iwasaki氏との共著), 『Scientific Reports』 第6巻, 2016, doi: 10.1038/srep37575.

Togo, F. (共著), 「Prospective increase in work time control with objectively measured fatigue and sleep: a 1-year observational study」, (Kubo, T., M. Takahashi, X. Liu, H. Ikeda, A. Shimazu, K. Tanaka, N. Kamata, Y. Kubo, J. Uesugi氏との共著), 『Journal of occupational and environmental medicine』 第58巻, 2016, p.1066-1072.

Togo, F. (共著), 「Sleep duration associated with the lowest risk of depression/anxiety in adolescents」, (Ojio, Y., A. Nishida, S. Shimodera, T. Sasaki氏との共著), 『Sleep』 第39巻, 2016, p.1555-1562.

Togo, F. (共著), 「Accelerometer-based Monitoring of Upper Limb Movement in Older Adults with Acute and Subacute Stroke」, (Narai, E., H. Hagino, T. Komatsu氏との共著), 『Journal of Geriatric Physical Therapy』 第39巻, 2016, p.171-177.

森田賢治(准教授)

〈著書〉

なし

〈雑誌論文〉

Ayaka Kato & Kenji Morita. Forgetting in reinforcement learning links sustained dopamine signals to motivation. *PLOS Computational Biology* 12(10):e1005145. (2016).

Jerome C. Foo, Kohei Nagase, Sawako Naramura-Ohno, Kazuhiro Yoshiuchi, Yoshiharu Yamamoto & Kenji Morita. Rank among peers during game competition affects the tendency to make risky choices in adolescent males. *Frontiers in Psychology* 8:16. (2017).

〈学会発表〉

Asako Nagase, Kenji Morita, Keiichi Onoda, Jerome Clifford Foo, Tomoki Haji, Shuhei Yamaguchi, &

Katsuyuki Sakai. Neural mechanisms of avoidance behavior for high cognitive demands. *Neuroscience 2016 (Society for Neuroscience's 46th annual meeting)* 89.07 (2016).

Ayaka Kato & Kenji Morita. Forgetting in reinforcement learning reconciles the two roles of dopamine: reward prediction error and motivational drive. *Neuroscience 2016 (Society for Neuroscience's 46th annual meeting)* 633.06 (2016).

岸哲史(助教)

〈雑誌論文〉

- Yamaguchi, I., A. Kishi., F. Togo, T. Nakamura, Y. Yamamoto. Wake-sleep transition from the perspective of cortico-thalamo-cortical loop: Electroencephalogram data analysis and simulation. *Proceedings of the 8th International Workshop on Biosignal Interpretation*, pp.112-115, 2016.
- Kishi, A., I. Yamaguchi, F. Togo, Y. Yamamoto. Markov modeling of sleep stage transitions and ultradian REM sleep rhythm: A simulation study. *Proceedings of the 8th International Workshop on Biosignal Interpretation*, pp.108-111, 2016.
- Varga, A. W., M. E. Wohlleber, S. Giménez, S. Romero, J. F. Alonso, E. L. Ducca, K. Kam, C. Lewis, E. B. Tanzi, S. Twardy, A. Kishi, A. Parekh, E. Fischer, T. Gumb, D. Alcolea, J. Fortea, A. Lleó, K. Blennow, H. Zetterberg, L. Mosconi, L. Glodzik, E. Pirraglia, O. E. Burschtin, M. J. de Leon, D. M. Rapoport, S. Lu, I. Ayappa, R. S. Osorio. Reduced slow-wave sleep is associated with high cerebrospinal fluid A β 42 levels in cognitively normal elderly. *SLEEP*, 39:2041–2048, 2016.
- Varga, A. W., E. L. Ducca, A. Kishi, E. Fischer, A. Parekh, V. Koushyk, P. L. Yau, T. Gumb, D. P. Leibert, M. E. Wohlleber, O. E. Burschtin, A. Convit, D. M. Rapoport, R. S. Osorio, I. Ayappa. Effects of aging on slow wave sleep dynamics and human spatial navigational memory consolidation. *Neurobiology of Aging*, 42:142–149, 2016.

〈招待講演・シンポジウム〉

- 岸哲史, 東郷史治, 山本義春. ヒト睡眠段階遷移のダイナミクスとNREM/REM睡眠超日リズムの生成機序. 第23回日本時間生物学会学術大会・シンポジウム「ノンレム睡眠, レム睡眠の切り替え

のメカニズムとその機能」, 愛知 (2016年11月).

- Kishi, A. Dynamics of sleep stage transitions and ultradian REM sleep rhythm in humans. HBSL State-of-the-Art Conference: Leading-Edge Biosignal Processing for Sleep Science. Nagoya City University Hospital, Aichi, Japan (October, 2016).

教職開発コース

秋田喜代美 (教授)

〈著書〉

秋田喜代美・あゆのこ保育園(著)『秋田喜代美の
写真で語る保育の環境づくり』ひかりのくに
pp.119. 2016

秋田喜代美「子どもの学びと育ち」佐藤学・秋田喜
代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人(編)『岩
波講座 教育変革への展望1 教育の再定義』
p111-126. 2016

秋田喜代美「序論 子どもという存在」佐藤学・
秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人(編)
秋田喜代美・小玉重夫(責任編集)『岩波講座
教育変革への展望3 変容する子どもの関係』
p.1-7. 2016.

秋田喜代美・佐藤学「序論 学びとカリキュラム」
p1-10. 秋田喜代美「授業づくりにおける教師
の学び」p.71-104. 田熊美保・秋田喜代美「新し
い学力像と評価のあり方」p273-309 佐藤学・秋
田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人(編)
秋田喜代美・佐藤学(責任編集)『教育変革への
展望 第5巻 学びとカリキュラム』岩波書店
2017

秋田喜代美「序 保育学講座刊行にあたって」p1-4.
「保育学としての問いと研究方法」p91-121. 日本
保育学会(編)秋田喜代美・柴崎正行(責任編集)
『保育学講座 第1巻 保育学とは』p.91-121
東京大学出版会 2016

秋田喜代美「日本の幼児教育の哲学と魅力をてらす
プリズムとして」大豆生田啓友・中坪史典(編)
『映像で見る主体的な遊びで育つ子ども:あそ
んでぼくらは人間になる』エイデル教育研究所
p140-141. 2016

秋田喜代美「教師のキャリア発達」「教師の成長」
学校心理学会(編).『学校心理学ハンドブック
第2版「チーム」学校の充実を目指して』p204-
206. 教育出版 2016.

秋田喜代美・皆川明「思考と身体感覚」『皆川明

100日WORKSHOP スペースシャワーブックス』
p114-125. 2017

(翻訳書)

イラム・シラージ、デニス・キングストン、エド
ワード・メルウィッシュ(著)秋田喜代美・淀川
裕美(訳)『「保育プロセスの質」評価スケール:
乳幼児期の「ともに考え、深め続けること」と「情
緒的な安定・安心」を捉えるために』明石書店
pp.117. 2016

大島純・森敏昭和・秋田喜代美・白水始(監訳)望
月俊男・益川弘如(編訳)『学習科学ハンドブ
ック第二版効果的学びを促進する実践/共に学ぶ』
第二巻 pp259. 北大路書房 2016.

〈論文〉

(学術論文)

宮本雄太・秋田喜代美・辻谷真知子・宮田まり子「幼
児の遊び場の認識: 幼児による写真投影法を用い
て」乳幼児教育学研究, 25, 9-21. 2016

一前春子・秋田喜代美・天野美和子「保幼小連携に
対する保護者の期待と効果の認識: 子どもの出生
順位と年齢の観点から」乳幼児教育学研究, 25,
67-79. 2016

秋田喜代美・淀川裕美・佐川早季子・鈴木正敏「保
育におけるリーダーシップ研究の展望」東京大学
大学院教育学研究科紀要, 56, 283-306. 2017

野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代
美「乳児保育の質に関する研究の動向と展望」東
京大学大学院教育学研究科紀要, 556, 399-419.
2017.

石橋太加志・浅香眞弓・新井恵里子・武田竜一・千
葉美奈子・廣井直美・前田香織・秋田喜代美・小
国喜弘・小玉重夫「中学生・高校生の協働学習に
対する認識と学校への適応感」東京大学大学院教
育学研究科紀要, 56, 351-364. 2017

(一般雑誌論文)

秋田喜代美「遊びを創りだす環境を共に創る」「遊
びを創りだす環境への保育者の支援」幼稚園じほ
う, 44 (2), 5-11, 24-26. 2016

秋田喜代美「明日の理科教育」SSTA通信 p3.
2016.

秋田喜代美「授業研究入門1回 観る一語る一振り
返る」授業UD研究, 1, 62-68. 2016

秋田喜代美「十代の子ども達の読書を考える」子ど
もと読書, 420, 2-5. 2016.

秋田喜代美「今こそ子どものための保育を 日本

における保育の機能と意味」教育と医学, 762, 2-3. 2016

秋田喜代美「対話的・協働的な学びを実現する学習活動」国語教育, 802, 4-7. 2016

秋田喜代美「見通しをもって取り組み振り返る思考力の育成」算数授業論究, 109, 6-7. 2017.

秋田喜代美「子どものエネルギーを引きだす：パワフルな新学年のスタート」児童心理, 71 (5), 12-18. 2017.

〈学会発表〉

(招待講演および国際学会発表)

Akita, K. 'Book Reading in Japan: Building up the communities of readers'. Key Note Speaker of Preschool and Primary School Teachers Congress. Asian Festival of Children's Content. in Singapore National Library. 2016.5 29

Akita, K. 2016 'Working Together; Fostering the teachers -parent alliance in Japan' Panelist of Parent Forum, Asian Festival of Children's Content. in Singapore National Library. May, 28. 2016.

Akita, K. 'Lesson Study as Professional Learning Communities in Japan' Sweden: Malme university Invited speaker. 2016. 8. 29

Akita, K. 'Characteristics of Innovative Professional Learning Communities: Inquiries for Deep Learning' Invited Key Note Speech WALS 10th conference EXCETER university. UK. 2016. 9. 3.

Akita, K. 'Developing LS System in ECECs in Japan: Knowledgeable insider and knowledgeable others. WALS10th conference *EXCETER university.UJ. 2016. 9. 5

Akita, K. 'Teachers' Collaboration for Deep Learning' Key Note Speaker The Fourth International Conference of school as Learning Communities. 2016. 10. 28

秋田喜代美「日本の授業研究 その最新動向」招待講演 台湾 淡江大学 2016. 4. 29

秋田喜代美「主体的協働的に学ぶためのICT活用」韓国教育情報学院 小講演 2017. 3. 29

秋田喜代美「未来教育の動向と学校の授業改革」大邱市教育庁招待講演 2017. 3. 29

(国内学会発表)

宮本雄太・秋田喜代美・辻谷真知子・宮田まり子・杉本貴代 2016. 4 「子どもの遊び観：幼児期・児童期の遊び場や遊び観に注目して 子ども環境

学会A2-09 (優秀ポスター発表賞受賞)

秋田喜代美「大会会長記念講演 日本の保育のみらい」第61回日本保育学会 東京学芸大学 2016. 5. 7.

(報告書)

秋田喜代美「まえがき」「研究の目的と実施体制」「まとめにかえて：今後の課題」保育環境・保育材部会 (部会座長秋田喜代美)「子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方」報告書 (財) 日本教材文化研究財団 調査研究シリーズ 62, 5-20., 145-147. そう頁167頁 2016.

(株) 浜銀総合研究所 文部科学省委託研究「子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書」(座長 秋田喜代美) pp235. 2017.3

藤江康彦 (教授)

〈著書〉

藤江康彦 (編著) 『“ダメ事例”から授業が変わる！ 小学校のアクティブ・ラーニング入門：資質・能力が育つ“主体的・対話的な深い学び”』 (寺本貴啓氏, 後藤顕一氏との共編), 文溪堂, 2016, 総頁数109.

藤江康彦 (編著) 『六つの要素で読み解く小学校アクティブ・ラーニングの授業のすべて』 (寺本貴啓氏, 後藤顕一氏との共編), 東洋館出版社, 2016, 総頁数184.

藤江康彦 (単著) 『「ことばの学び」が生まれるとき』 お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会 (編) 『ともにつくる「ことば」の学習：聴く・考える・つむぐ』, 展望社, 2017, Pp.12-16.

〈学会発表〉

藤江康彦 (課題研究発表) 「アクティブ・ラーニングを支える授業研究」 (寺本貴啓 (企画) 課題研究発表) 「理科において新しい教育課程をどのように考えるのか」, 日本理科教育学会第66回全国大会 (於：信州大学, 長野市), 日本理科教育学会全国大会発表論文集, 2016, 第14号.

藤江康彦 (話題提供) 「授業研究から「アクティブ・ラーニング」への問い」 (藤江康彦 (企画) 自主シンポジウム「初等中等教育段階の「アクティブ・ラーニング」への教育心理学的アプローチ (企画・司会・話題提供)」, 日本教育心理学会第58回総会 (於：サンポートホール高松, 高松市), 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 2016, 106-

107.

藤江康彦（学会発表）「小中一貫校における教師の子どもをとらえる視点の変容：発達の視点の拡張と実践の創出との関連に着目して」, 日本教育心理学会第58回総会（於：サンポートホール高松, 高松市）, 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 2016, 211.

〈講演等〉

藤江康彦（企画・司会）「課題研究Ⅳ 教師教育における事例研究の教育方法的検討：「アクション・リサーチ」や「ケース・メソッド」の可能性と課題（企画・司会）」（深澤広明氏と共同企画, 登壇者：木村優氏, 姫野完治氏, 竹内伸一氏）, 日本教育方法学会第52回大会（於：九州大学, 福岡市）, 日本教育方法学会第52回大会発表要旨, 149-154.

浅井幸子（准教授）

〈著書・共著〉

佐藤学・秋田喜代美編『岩波講座教育 変革への展望 4 学びの専門家としての教師』岩波書店, 2016年8月。（第2章「教師の教育研究の歴史的位相」35-64頁。）

浅井幸子・黒田友紀・杉山二季・玉城久美子・柴田万里子・望月一枝『教師の声を聴く—教職のジェンダー研究からフェミニズム教育学へ』学文社, 2016年10月。

〈学会発表〉

浅井幸子「乾孝の保育の心理学—保育者との共同研究に着目して—」日本教育学会第75回大会, 2016年8月25日。

太田素子・浅井幸子・浜田真一・楠瑞希子・里見実・古沢常雄・阿部真美子「幼児教育における「遊び」と「学び」—プロジェクト活動の史的展開を手がかりに—」教育史学会第60回大会, 2016年10月2日。

Sachiko ASAI “History of School-based Lesson Study”, The Fourth International Conference of School as Learning Community, October 29, 2016, Beijing Normal University.

浅井幸子「「伝えあいの心理学」の成立と東京保育問題研究会—1960年代後半の表現三部会合同研究を中心に—」幼児教育史学会第12回大会, 2016年12月10日。

〈その他〉

（書評）「松島のり子『「保育」の戦後史—幼稚園・保育所の普及とその地域差』を読んで」『日本教育史研究』35号, 2016年9月, 206-213頁。

（書評）「二見素雅子著『明治後期の保育内容における「公正さ」に関する研究』」『幼児教育史研究』11号, 2016年11月, 67-70頁。

（書評）「奥平康照『山びこ学校のゆくえ—戦後日本の教育思想を見直す—』」『教育学研究』83巻4号, 2016年12月, 106-108頁。

（報告）「幼児教育史学会第12回大会に参加して」『幼児教育史学会会報』23号, 2017年2月, 6-7頁。

教育内容開発コース

藤村宣之（教授）

〈著書〉

Fujimura, N.（分担執筆）, *Frontiers in developmental psychology in Japan*. (Japan Society of Developmental Psychology (Ed.), S. Iwatate, M. Koyasu, & K. Negayama (Supervising Editors)), Hitsuji Shobo Publishing, 2016, Pp.149-164, (Conceptual understanding in childhood.を単独執筆).

藤村宣之（分担執筆）, 『アクティブ・ラーニングの教育方法的検討』（日本教育方法学会編）, 図書文化, 2016, 83-98頁（「探究と協働を通じた一人一人の子どもの「深い理解」: 教育心理学（学習論）からみたアクティブ・ラーニング」を単独執筆）.

藤村宣之（分担執筆）, 『岩波講座 教育 変革への展望 5 学びとカリキュラム』（秋田喜代美編）, 岩波書店, 2017, 105-131頁（「知識基盤社会における学力の構造と理数科リテラシー」を単独執筆）.

〈雑誌論文〉

藤村宣之（単著）, 「「高大接続」が小中高にもたらすもの（算数・数学）」, 『指導と評価』（日本教育評価研究会）平成28年9月号（741号）, 2016, pp.15-17

藤村宣之（単著）, 「フィンランドの児童の数学的思考と学習観に関する発達的研究」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第56巻, 2017, pp.495-504.

学校開発政策コース

勝野正章（教授）

〈著書〉

Katsuno, M. (2016). *Teacher evaluation policies and practices in Japan: How performativity works in schools*. Oxon, New York: Routledge.

小島弘道・勝野正章・平井貴美代『学校づくりと学校経営』（小島弘道監修 講座 現代学校教育の高度化8）学文社 2016年9月, 177p. 「第6章 参加型学校づくりの課題」（pp.156-173）執筆
 佐藤学ほか編『学びの専門家としての教師』（岩波講座 教育 変革への展望4）岩波書店 2016年8月, 243p. 「教師の職務の公共性と専門家としての責任」（pp.227-243）執筆

〈雑誌論文〉

勝野正章「自治体教育政策が教育実践に及ぼす影響—授業スタンダードを事例として」『日本教育政策学会年報』, 第23号, 2016年6月, pp.95-103.
 勝野正章「職能研修団体としての教頭会」, 『学校運営』, No.662, 2016年9月号, pp.6-9.
 勝野正章「人事考課と学校づくり」『学校運営』, No.666, 2017年1月号, pp.6-9.

〈その他〉

木場裕紀・福嶋尚子・津田昌宏・盛藤陽子・勝野正章・大桃敏行「学力保証のための学校の取り組み—全国学力・学習状況調査に関する教員への質問紙調査から—」, 日本教育学会第75回大会, 2016年8月25日, 北海道大学
 勝野正章「日本の教員調査から」東京大学大学院教育学研究科・学校教育高度化センター シンポジウム「国際的な学力論争に日本はどう向き合おうとしているのか—標準化と多様性をめぐるダイナミズム—」2016年11月5日, 東京大学
 勝野正章「教員のメンタルヘルス 教育行政にできること, すべきこと」メンタルヘルス関連三学会合同大会シンポジウム, 2016年12月11日, 一橋講堂
 勝野正章「ミドル・リーダーの学校経営」『教育新聞』連載 第3470号（2016年9月12日）～第3481号（2017年2月27日）

村上祐介（准教授）

〈著書〉

河野和清（編著）, 『現代教育の制度と行政』, （担当：分担執筆, 範囲：55-73頁（4章「教育行政」を担当））福村出版 2017年3月
 小玉重夫（編著）, 『学校のポリティクス（岩波講座教育 変革への展望 第6巻）』, （担当：分担執筆, 範囲：265-281頁（「地方教育行政改革の政治学—日本の事例から—」））岩波書店 2016年11月
 教育開発研究所編, 『教育の最新事情がよくわかる

本3—これだけは知っておきたい 教員としての最新知識！（教職研修総合特集）』（担当：分担執筆, 範囲：35-40頁（「地方の教育行政の仕組みってどう変わったの？」「教育大綱ってどんなことが書かれてるの？」））教育開発研究所 2016年6月

〈雑誌論文〉

村上祐介, 「教育委員会事務局の専門性と人事・組織—全国調査の結果から」, 『教育行政学論叢』(36) 2016年10月, pp.73-103
 小玉重夫・荻原克男・村上祐介, 「教育はなぜ脱政治化してきたか—戦後史における1950年代の再検討」, 『年報政治学』(2016-I) 2016年6月（査読有） pp.31-52
 村上祐介, 「教育行政の国—地方関係の実態と変化」, 『都市問題』(107) 2016年5月 pp.71-77

〈その他〉

村上祐介, 「本調査研究のまとめ」, 『平成28年度「幼児教育の推進体制構築事業」の実施に係る調査分析事業 成果報告書」, 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター, 2017, pp.38-42.
 村上祐介, 「第二次安倍政権の教育政策——『お金をかけない教育改革』の是非（シノドス2016年5月26日）（<http://synodos.jp/education/17176>）
 村上祐介, 「新教育委員会制度の1年間を振り返って」（『月刊公明』2016年5月号, 42-47頁）

〈学会発表〉

Y. Murakami, Y. Ogiwara, Y. Kawakami The mayoral control over educational policy in Japan: recent trends in reform of the school board system 15th HICE Conference 2017年1月4日
 村上祐介「日本の教育委員会調査から」シンポジウム「国際的な学力競争に日本はどう向き合おうとしているのか」2016年11月5日
 佐々木織恵, 高木加奈絵, 澤田俊也, 村上祐介, 大桃敏行「自治体におけるガバナンス改革の態様—全国市区町村教育委員会への質問紙調査を通じて—」日本教育行政学会第51回大会 2016年10月8日
 村上祐介「自治体調査の結果から（解説）」発達保育実践政策学センター公開シンポジウム 2016年9月17日
 村上祐介「東京大学発達保育実践政策学センターの取り組み」日本保育協会第6回学術集会 2016年

9月3日

学校教育高度化・効果検証センター

山本義春(教授)

〈論文〉

- Iwasaki, S., S. Karino, T. Kamogashira, F. Togo, C. Fujimoto, Y. Yamamoto, and T. Yamasoba. Effect of noisy galvanic vestibular stimulation on ocular vestibular evoked myogenic potentials to bone-conducted vibration. *Frontiers in Neurology* 8: 26-1-7, 2017.
- Foo, J. C., K. Nagase, S. Naramura-Ohno, K. Yoshiuchi, Y. Yamamoto, and K. Morita. Rank among peers during game competition affects the tendency to make risky choices in adolescent males. *Frontiers in Psychology* 8: 16-1-14, 2017.
- Fujimoto, C., Y. Yamamoto, T. Kamogashira, M. Kinoshita, N. Egami, Y. Uemura, F. Togo, T. Yamasoba, and S. Iwasaki. Noisy galvanic vestibular stimulation induces a sustained improvement in body balance in elderly adults. *Scientific Reports* 6: 37575-1-8, 2016.
- Hayano, J., F. Yasuma, E. Watanabe, R. M. Carney, P. K. Stein, J. A. Blumenthal, P. Arsenos, K. A. Gatzoulis, H. Takahashi, H. Ishii, K. Kiyono, Y. Yamamoto, Y. Yoshida, E. Yuda, and I. Kodama. Blunted cyclic variation of heart rate predicts mortality risk in post-myocardial infarction, end-stage renal disease, and chronic heart failure patients. *Europace* doi:10.1093/europace/euw222, 1-9, 2016.
- Inada, S., K. Yoshiuchi, Y. Iizuka, K. Ohashi, H. Kiduchi, Y. Yamamoto, T. Kadowaki, and A. Akabayashi. Pilot study for the development of a self-care system for type 2 diabetes patients using a personal digital assistant (PDA). *International Journal of Behavioral Medicine* 23: 295-299, 2016.
- Miki, Y., Y. Suzuki, E. Watanabe, J. Hayano, Y. Yamamoto, T. Nomura, and K. Kiyono. Long-range correlations in amplitude variability of HF and LF components of heart rate variability. In: *Proceedings of 38th Annual International Conference of IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC 2016)*, pp. 6218-6221, 2016.
- Watanabe, E., K. Kiyono, Y. Yamamoto, and J. Hayano. Heart rate variability and cardiac diseases. In: *Clinical Assessment of the Autonomic Nervous System*, Iwase,

S., J. Hayano, and S. Orimo, editors. Springer, New York, pp163-178, 2016.

- Malik, M., R. Sassi, S. Cerutti, F. Lombardi, H. V. Huikuri, C. -K. Peng, G. Schmidt, and Y. Yamamoto. Assessing cardiac autonomic function via heart rate variability analysis requires monitoring respiration: reply. *Europace* 18: 1280-1281, 2016.

〈招待講演〉

- Yamamoto, Y. Multiscale analysis for behavioral intermittency and inertia —toward objective and predictive mental health— (invited). *Workshop on “Mathematical Identification of Momentary Biomarkers” by Excellence Initiative of University of Heidelberg*, Mannheim, Germany (April, 2016).

高橋史子(助教)

〈雑誌論文〉

- 高橋史子(単著), 「[文化]の適応と維持から見る日本型多文化共生社会」, 『異文化間教育』第44号, 異文化間教育学会, 2016, p.p.33-46.

〈報告書・Working Paper〉

- Fumiko Takahashi(共著), “Cleaning as Part of TOKKATSU”, 『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター研究紀要』Vol.2, 2017, (Ryoko Tsuneyoshi, Kanako Kusanagiとの共著), 2016, pp.138-149.

- 高橋史子(単著), 「シンガポールにおける民族間関係・ナショナリズムと教育—「学力」観の変容を視野にいたした先行研究レビュー—」, 『Working Papers Vol. 3 February 2017 ガバナンス改革と教育の質保証に関する理論的実証的研究—平成28年度報告書—科学研究費補助金基盤研究(A)(研究代表者:大桃敏行 課題番号:26245075)』, 東京大学大学院教育学研究科大桃敏行研究室, 2017, pp.116-122.

〈学会発表〉

- 高橋史子(単独), 「多文化共生とナショナリズム—エスニックマイノリティ文化の維持に関する教師の意識調査—」, 第64回関東社会学会, 2016.
- 高橋史子(単独), 「[ニューカマー児童・生徒のアイデンティティと文化—教師へのインタビュー調査—」, 第68回日本教育社会学会大会, 2016.
- 高橋史子(単独), 「[ナショナルアイデンティティとニューカマー児童・生徒のアイデンティティ—文化—ニューカマー児童生徒を教える教員へ

のインタビュー調査一], 第89回日本社会学会大会, 2016.

〈シンポジウム〉

高橋史子 (共同), 「国際化モデルとしての日本モデルの可能性や課題—国際比較と新モデルの生成」(恒吉僚子教授・草彌佳奈子氏との共同発表), シンポジウム「海外における「日本式」教育 エジプトへの導入開始とフィンランド・シンガポールからの示唆」, 科研費基盤(A)15H01987「日本型21世紀対応教育の国際モデル化に関する国際比較研究—多元的モデルの構築」(代表: 恒吉僚子), 主催: 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター, 2016.

草 彌 佳奈子 (特任研究員)

〈その他〉

草彌佳奈子 (単著) 「台湾のカリキュラム改革と学びの共同体の実践」, ガバナンス改革と教育の質保証に関する理論的実証的研究: 平成28年度報告書pp.111-115

Kusanagi, K. N. (共著) “Cleaning as Part of Tokkatsu: School Cleaning Japanese Style”, Tsuneyoshi, R., Kusanagi, K., & Takahashi, F. “Center for Excellence in School Education Graduate School of Education, The University of Tokyo *Working Paper Series in the 21st Century International Educational Models Project*, No.6, August 2016.

〈講演〉

恒吉僚子, 高橋史子, 草彌佳奈子 (共同発表) 「国際化モデルとしての日本モデルの可能性や課題—国際比較と新東京大学大学院教育学研究科の生成」日本型21世紀対応教育の国際モデル化に関する国際比較研究—多元的モデルの構築プロジェクト (科研A) シンポジウム『海外における「日本式」教育モデル—エジプトへの導入開始とフィンランド・シンガポールからの示唆—』東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター主催, 東京大学情報学環福武ホール, 2016年12月10日

Kusanagi, K. N. (招待講演) Lesson study as a Japanese Model of Professional Development and Professional Learning Community. Tokyo Chapter of the Japan Association for Language Teaching Seminar (Invited Speech), NYU School of Professional Studies (ALI) Tokyo Center April 1, 2016

〈学会発表〉

Kusanagi, K. N. Diversification of Education Transfer: The Japanese Education Model in a Foreign Context. University of Tokyo Joint International Seminar between Stockholm University, University of Jyväskylä, and University of Tokyo. International Seminar Education for Diversity, University of Stockholm, February 23, 2017.

発達保育実践政策学センター

野 澤 祥 子 (准教授)

〈著書〉

野澤祥子 (単著) 歩行開始期の仲間関係における自己主張の発達過程に関する研究 風間書房 2017

野澤祥子 (共著) 子育てを通じた親・家族の発達 高辻千恵・山縣文治 (編著) 家庭支援論 ミネルヴァ書房 pp.40-51 2016

野澤祥子 (共著) 保育所等在籍児の家庭への支援 高辻千恵・山縣文治 (編著) 家庭支援論 ミネルヴァ書房 pp.107-119 2016

〈雑誌論文〉

野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美 乳児保育の質に関する研究の動向と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要第56巻 pp.399-419 2017

野澤祥子・石井悠 幼児の小集団における紙絵本とデジタル絵本へのかかわり 日本発達心理学会第28回大会 2017

淀川裕美・野澤祥子・秋田喜代美 認定こども園におけるリーダーシップと園の取り組みに関する分析 1—園長のリーダーシップに焦点を当てて— 日本乳幼児教育学会第26回大会研究論文集 pp.338-339 (査読無・口頭発表) 2016

野澤祥子・淀川裕美・秋田喜代美 認定こども園におけるリーダーシップと園の取り組みに関する分析 2—主任のリーダーシップに焦点を当てて— 日本乳幼児教育学会第26回大会研究論文集 pp.340-341 (査読無・口頭発表) 2016

関 智 弘 (特任助教)

〈著書〉

なし

〈雑誌論文〉

関智弘 (単著), 「生活保護行政と自殺: 最後のセー

フティネットは機能しているのか], 『公共選択』, 2016, pp.82-99.

関智弘 (共著), 『平成28年度「幼児教育の推進体制構築事業」の実施に係る調査分析事業 成果報告書』(村上祐介氏, 阿部慶徳氏との共著), 発達保育実践政策学センター, 2016, pp.24-37, 43-65.